

教育フォーラム「これからの教育—変えねばならないこと、変えてはならないこと」

日時：2010年11月14日

場所：羽曳野市郡戸470 畑田家住宅

主催：畑田家住宅活用保存会

後援：羽曳野市・羽曳野市教育委員会 協賛：大阪大学総合学術博物館

パネラー：関口焔¹、池田光穂²、栗山和之³、大友庸好⁴、山本清⁵、疋田和男⁶、
久堀雅清⁷、安部孝人⁸、戸川好延⁹、吉澤則男¹⁰、畑田耕一(司会)¹¹

本文は、2010年11月14日(日)、大阪府羽曳野市郡戸の畑田家住宅で、畑田家住宅活用保存会主催、羽曳野市・羽曳野市教育委員会後援、大阪大学総合学術博物館協賛のもとに開催された教育フォーラム「これからの教育—変えねばならないこと、変えてはならないこと」の録音記録を司会者の畑田耕一が編集し、上記の10名のパネラーが校正して作成したものである。当日の一般参加者のご意見も取り入れられていること、ならびに、畑田家住宅活用保存会幹事矢野富美子氏には本文の編集に当たり多大なご支援をいただいたことを記して謝意に代える。

1. はじめに	2
2. パネラー自己紹介	2
3. 小学生とその家庭は今	3
4. 対話型(一問一答型)授業は出来るか—コミュニケーション能力の開発	4
5. 学ぶ意欲と問題に基づく学習(PBL: Problem Based Learning)	7
6. 教育理念の学校現場での実践—対話型学習と総合的な学習の活用	10
7. 子供たちの学習意欲をどのようにして向上させるか—ハードルを乗り越える快感	13
8. 教員の人材育成と先生と生徒・保護者間の信頼感の確立	16
9. 原級留め置きを考える	18
10. 生徒にとって魅力ある先生になろう—先生と生徒の親近感と敬愛の心	19
11. 学校は社会の縮図—教師、親、子供が一緒になって話し合い、考えよう	22
12. 根本原理の教育を考える	25
13. PTA、PTSAを活性化できないか?	26
14. 教育現場にゆとりを取り戻そう	27
15. マスコミと教育	30
16. 学校の建物・設備—民間企業の発想を学校現場に持ち込むことの是非	31
17. 教育にPhilosophyを—根本原理を考える教育を	33
18. 継続は力なり	35
19. 終わりに—大人は子供のロールモデル	37

¹フランス国立科学研究センター名誉研究員、²大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授、

³大阪府立春日丘高等学校校長、⁴梅花学園入試担当、⁵前羽曳野市立丹比小学校校長、

⁶前羽曳野市立古市小学校校長、⁷前羽曳野市立高鷲南中学校校長、⁸羽曳野市立西浦東小学校校長、

⁹羽曳野市教育委員会教育室長、¹⁰羽曳野市教育委員会文化財保護課、¹¹大阪大学名誉教授・畑田家住宅当主

1. はじめに

畑田 皆さん、こんにちは。畑田家住宅活用保存会の教育フォーラムに、沢山の方にご参加いただきまして、有難うございます。

現在の日本の教育については、いろいろなことが言われています。上級校への入学結果による学校のランク付けや、OECDの国際学習到達度調査の国別順位と教育方法を関連付けようとする議論も盛んです。でも、議論が、社会教育、生涯教育よりも、学校教育に少し偏っていることや、試験の点数で表示されるような教育の効果だけが議論されることが多い点が気になります。日本、そして、世界の将来に自分の勉強・学習の成果を活かすという社会人の役割を果たせる人材を育てるには、どのような教育が良いのかという観点からの考察が、もう少し必要ではないでしょうか。このフォーラムでは、この様な視点から、今の日本の教育システムの中で、変えなければならぬのはどれで、変えてはいけないものはどれかを、自由に語り合っただきたいと思えます。パネラーには、小学校から大学に至るまで、いろいろな形で教育に関係しておられる10名の先生方にお越しいただいております。一般参加の皆様方と一緒に現在の日本の教育のことを考えていこうという集まりです。会の進め方ですが、前半は皆様に自由にご発言いただき、その内容をもとにして、後半で、現在の教育で、「変えねばならないこと、変えてはならないこと」について、ある程度の結論が得られれば有り難いと思っております。ご協力よろしくとお願い申し上げます。それでは、最初にパネラーの先生方、簡単な自己紹介をお願い致します。

2. 自己紹介

戸川 羽曳野市教育委員会学校教育室の室長を務めております。去年は羽曳野中学校の校長で、学校現場と教育委員会を行ったり来たりしております。実は、この畑田家の校区であります河原城中学校に開校当初から9年間勤務し、その後また教頭も務めまして、この地域には懐かしい思い出が一杯あります。

安部 昨年まで、今お話になった戸川室長の、前任の室長でございました。只今は西浦東小学校の校長です。教育委員会と教育の最前線である小学校では、やはりかなりのギャップがあるなど感じております。その辺りのことも、後ほどお話しさせていただきたいと思っております。

久堀 私は、この3月に羽曳野市内の中学校での37年間の教師生活を終え、定年退職いたしました。今日は、中学校勤務37年間の感想を述べるというような形で議論に加わらせていただきたいと思っております。

疋田 私も、この3月で長年の小学校教員の生活を終え、羽曳野市の古市小学校の校長を最後に定年退職いたしました。畑田先生に今日の出席を依頼されたときに、現役を離れておれば、いろんなことを自由に言えるでしょうと言われたのですが、いろいろとしがらみがあって、自由な発言が出来るかどうか一寸分らないというのが正直な思いです。

山本 本年3月31日に、ここから300メートルほどのところにある丹比小学校の校長を定年退職いたしました。在職中は、子供たちがこの畑田家を見学したり、ここで絵をかいたりして、畑田先生や中村貞夫画伯、区長さんご夫妻にはお世話になりました。退職後は、博物館に勤務しております。

大友 豊中市立の中学校の校長で定年を迎えたあと、私立の梅花高等学校・中学校で入試関係の担当をしております。畑田先生には、出前授業でお世話になったり、そのあと、ロータリーのいろいろな集いにお誘いいただいたりして、お付き合いしております。今日は、公立学校と私立学校の両方に関わる問題についてもお話しできればと思っております。

栗山 大阪府立富田林高校に教諭で10年、そのあと大阪府の教育委員会に16年、教育委員会での最後の3年間は大阪の高等学校を統括する高等学校課の課長をしておりました。現在は、大阪府立春日丘高等学校の校長を務めております。府立の高等学校については、いろいろとお話できることがあるかと思っております。

池田 大阪大学コミュニケーションデザインセンターの教員・臨床部門の教授をしております。

文化人類学、特に、医療人類学、メディカルアンソロポロジーという分野が専門ですが、現在は、臨床コミュニケーションや対話力、とりわけ対話を使った授業を、大阪大学の大学院生に行っております。

関口 私は、日本の小・中・高等学校には、あまり関係したことがありません。昭和 31 年から 40 年間、フランスのパリ大学で研究・教育に当たっております。その間、日本の状況を外から見ていたという意味で、日本の現状を外国のそれと比べつつ、これからの教育の展望も含めて、いろいろな意見を述べる事が出来ればと思っております。

吉澤 羽曳野市教育委員会の社会教育課世界遺産登録準備室で古市古墳群を世界遺産に登録するための仕事をしております。学校現場は、ほとんど知らないのですが、一人の保護者としての PTA や青少年指導員の仕事もしておりますので、そういう立場から意見が言えればと思います。

畑田 どうも有難うございました。まさに、多士済済のパネラーの先生方でございます。また、一般参加者の方もいろいろな分野から来ていただいております。中国、イランからの留学生もおられまして国際的でもあります。いろいろと素晴らしい意見が得られるものと期待しております。

小学校の教育は学校教育の始まりという点で非常に大事な過程です。それで、小学校の先生のご発言から始めたいと思います。

3. 小学生とその家庭は今

安部 教育行政の分野で 10 年あまり仕事をして、久しぶりに現場すなわち教育の最前線に戻った率直な感想は随分変わったなということです。第一は、家庭の教育力が著しく低下していることを実感した点です。これは私が今いる学校だけではなくて、ほとんど全てにわたってそうなのですが、私が教員になった 30 数年前と今を比べますと、たとえば、1 人親家庭の率が非常に高くなってきています。クラスによっては 20~30%は 1 人親家庭という状況です。それから、いわゆる就学援助率ですが、大阪市では 30%を越えているそうですが、羽曳野市でもやはり 2 割から 3 割の生徒が就学援助を受けながら学校に通っています。その反面、非常に裕福な家の子供も多くて、いわゆる二重構造、2 極分化になっています。裕福な家庭では、幼少期、幼稚園に行く前から、たとえば英語教育にお金をかける、中学校からは公立には行かないで私学に行くというふうに子供の教育にかかるお金という点でも 2 極化が進んでいます。一方、最近よく話題になる保護者による子供の虐待や必要な世話や配慮を怠るネグレクトですが、この問題も以前と比べて多くなっているように思います。そうかと思えば、過保護、過干渉、親御さんが子供にべったりで母子カプセルから抜け出せないというケースもあります。これもある意味の 2 極化です。

第二の問題は少子化です。10 数年前の羽曳野市の幼稚園の園児数は、市立幼稚園 14 園に対して 1200 名を越えていましたが、現在は 800 名余りになっています。少子化が進んでいるのは間違いないです。これが、子供たちの普段の生活形態にも影響しています。家に帰っても子供が 1 人しかいないと、いわゆる仲間遊び、群れて遊ぶことができなくて、テレビ、コンピュータゲームなど機械相手にバーチャルな世界で遊ぶということになる。たとえ、今日は友達と遊ぶということで、友達の家遊びに行っても、そこで群れて遊んでいるかということ、そうではなくて、A 君はテレビゲームをしている、B 君は本を読んでいる、C 君は別の場所でパズルをしている、そのうちに、電子音がピッピッピッと鳴って、A 君が「僕、塾に行く時間やから帰るわ」と出ていく。これが今の子供の、遊びの現状です。変わったなあと思います。

三番目は希望がないというか、将来に希望を持ってない子供が増えたということです。「別に」とか、「別にどうでもええよ」というような、ある意味、投げやりというか、無気力、無関心とも取れることを言う子供が増えてきたと感じます。10 数年前に私が小学校の教育現場にいたころの子供たちの多くは、なんとか一生懸命がんばって、家族を養える立派な人間になりたいという気持ちを持っていたと思うのです。今の日本では、大人になっても、フリーターとかニートとか、そんなに頑張らなくても、適当に遊びながらでもなんとか生きていける。ひよっとしたら、子供たちが、子供なりにそんなことを感じるとして、将来に希望を持ってない、無気力、無関心で、何事

にも意欲の無い状態に陥っているのかなとも思います。

畑田 家庭の教育力の低下、その原因の一つと考えられる1人親家庭、子供の就学援助を必要とする家庭の増加、子供たちの家庭の経済状態の2極分化の問題、虐待やネグレクトならびに過保護、過干渉、日本が世界の先端を走っているといわれる少子化の問題とそれに伴う遊びなど子供たちの普段の生活形態の変化、いわゆる仲間遊びの出来ない子供の増加、将来に希望を持ってない無気力、無関心で意欲のない子供の増加など、教育上重要な問題を指摘していただきました。家庭の教育力の低下は由々しい問題として、親・保護者は教育基本法第十条「父母その他の保護者は、子の教育について第一義的責任を有するものであって、生活のために必要な習慣を身に付けさせるとともに、自立心を育成し、心身の調和のとれた発達を図るよう努めるものとする」の精神を良く噛みしめていただきたいと思います。ただ、これらは、どうもネガティブな話ばかりなのですが、これからの日本を背負う今の子供たちは、昔に比べて、こういう点で大変良くなっているという話は無いのでしょうか。

安部 良くなったことは、人前で、物怖じしないで話しの出来る子供が増えたことでしょうか。昔の子供は、人前に出ると恥ずかしがってなかなかしゃべれなかったのですが、今の子供は人前でも、堂々とものを言います。

畑田 授業中はどうでしょうか。授業中も、物怖じせずに子供が先生にどんどんと質問をしたり、意見を言うのでしょうか。

安部 先生が促せば、高学年のクラスなら、質問をしたり、意見を言う子供がかなりいます。少なくとも私の小学校ではそうです。私は、校長として、授業を見て回るので、よく分かります。教室の前の扉から子供たちの様子を見るのですが、勉強に集中している子はしっかりと教師を見ながら、黒板を見ながら、手を動かしています。こういう子供たちは、質問もするし、意見も言える。一方、勉強に集中できない子供は、どうしようもなく、目が泳いでいます。これも2極化です。昔のように、たとえ授業が難しくても、皆が一所懸命分かろうと努力しているのではなくて、一所懸命努力している子供はどんどん勉強するけれども、しない子供は徹底的にしないという2極化がここでも進んでいます。このような2極化の状態にある子供たちの指導に、今、学校現場は苦勞し、苦慮しているわけです。

畑田 2極化していて、真ん中はいないわけですね。

安部 そうです。2極化していて、真ん中はほとんどいない。おそらく他の小学校も良く似た状況だろうと思います。

畑田 このような勉強意欲の2極化と、先ほどお話しがあった家庭の経済状態の2極化や家庭の教育力の低下との関連性の解析も問題の解決にある程度役立つような気がします。今日、後で、もし時間があれば、少しでもご意見を頂きたいところです。

それでは、小学校の話をもう少し伺いたいと思います。

4. 対話型（一問一答型）授業は出来るか—コミュニケーション能力の開発

山本 日本人は私も含めて、人前で、筋道立てて話をするのが苦手です。子供たちは特にそうだと思います。外国の子供たちは、すごく自分の考えや未来像、夢を語りますが、日本の子供たち、特に小学校の子供たちの多くは、それが苦手だと思います。先ほど、安部先生から小学校でも高学年なら質問をしたり、意見の言える子供がかなりいるというお話がありましたが、それは多分質問や意見を一方的に言えるだけであって、自分の意見を言い、それに対する人の意見を良く聞いて、さらに、それに対して自分はこう思うというようなことは出来ないのではないかと思います。本当の議論・討論がなかなか出来ないのです。学校では、担任の先生の質問に単発的に答えるというようなことすら、なかなか改善できないのが現状です。国際社会で、地球規模の観点から物事を考えなければならない時代になってきた今、子供の質問に先生が答える、先生が言えば子供が応じる、いわゆる一問一答型の授業が続けられるような、先生と生徒の間の双方向授業、さらには、子供同士でも卓球の試合のピンポン球のように意見の交換が出来るような子供を育て

ることが必要なのです。子供たちを、いろいろな人と、話し合え、意見を戦わせることのできる人間に育て上げることが、これからの教育者の重要な使命だと思います。

畑田 有難うございました。これからの国際社会に日本が貢献していくのに、小学校の教育はどう変わらねばならないかについて、素晴らしい提言を頂きました。このような点に関して、中学校はいかがでしょうか。ご意見を頂きたいと思います。

久堀 授業での子供たちの発言が多いとは言えないと思います。もちろん教員の授業の仕方や授業力にもよるとは思いますが、やはり受ける授業というか、双方向ではなくて、教員から生徒への一方授業が行われているというのが、実際の中学校の姿だと思います。それと、今の中学校では、学力、学習面とともに、生活面というか、生活指導の部分が大変大きな課題になっていて、教員はこれに関わる様々な問題を抱えて苦慮しているのが、大阪だけでなく、全国の中学校の現状かなと思います。学びの面でも、生活の面でも、全ての分野で、一所懸命がらばるといふ、人間としての熱意・意欲は、幼児期の育て方や親・保護者のあり方に強く依存していることは間違いのないと思います。最初に話の出た家庭の教育力の問題です。これを考慮して、日本の教育の仕組みを変えていくことが、喫緊の課題です。これに関しては、後でもう一度、意見を述べさせていただきます。

畑田 生徒の生活面の問題の学校教育の中での取り扱いについては、後で時間があれば、もう一度議論していただくことにしたいと思います。

もう一つ先ほどから話題になっていることですが、これからの日本にとってどうしても必要な、他人との意見交換を通してお互いの考えを深め、多様な意見の存在する集団の中から、一つの方向性を見出していけるような能力を備えた人間をどのようにして育てるかという問題です。このような教育はこれまでの日本ではほとんど行われてこなかったのは間違いありません。この点について、池田先生、大学の立場からご意見を頂けますでしょうか。

池田 私どもの大阪大学コミュニケーションデザインセンターは大学院が中心なのですが、学部高学年の学生もいます。この5年間、対話型の教育をやってきたのですが、授業を受ける学生は、いわゆるゆとり教育の世代の人たちです。グループディスカッションなどをやらせると、結構熱心に話してくれます。また、ある程度段取りをつけてやると、発表も出来ます。こういう能力は、明らかに最近の若い人たちの方が高いと思います。対話型教育で能力の高い学生に聞くと、今まで中学校や高校でこういう授業を受けてきたと言います。マスメディアなどでは、ゆとり教育が、随分バッシングされて、また再度、厚い教科書に戻りつつありますが、私の現場的な感覚から言うと、この学力中心的世界への回帰は、ひょっとすると中・長期的にあまり良くない影響が出るかもしれません。私は、姫路にある私立大学でも同じ対話型教育をやっています。学生の注意力は明らかに低いですが、最初の数回の授業の後では、大阪大学と同様に、多くの学生が、人の話を聞いて適切にコメント出来るようになります。遠慮せず、物怖じせず、率直に対話の出来る学生が多いのが、ゆとり教育の所為か、それとも優秀な大学の学生だからそうなのかは判然としませんが、私は大学生の対話能力がそんなに低いとは思っていません。

畑田 少なくとも今の大学生に関しては、私もそう思います。ある程度の指導さえすれば、今の大学生は対話型の教育を成り立たせるだけの能力は備えています。私も先日、兵庫県の豊岡高校で、対話型とまでは言えないかもしれませんが、それに近い授業をやってみたら、結構成り立ちました。切っ掛けを与えて、適切な指導をすれば、対話型授業は出来るのだという気がしました。

ところで、ゆとりの教育は、勿論、子供を遊ばせるために文科省が始めたのではなくて、総合的な学習と組み合わせることで、教員が生徒に一方的に教える時間を多少減らしてでも、子供に自由に考え、議論する能力をつけさせようというのが基本理念だったと思います。その理念が、教員や保護者の中に十分浸透していなくて、何かあると、総合的な学習とゆとりの教育の所為にするという風潮が出来てしまいました。ただ、対話や議論は知識の蓄積と活用なしには成り立ちません。知識偏重は良くないが、知識の蓄積を忘れた総合的な学習はたわごとに過ぎません。知識の学習をどのようにしてするのかを、生徒・学生にしっかりと体得させておくことが重要です。

極端なケースかもしれませんが、先生が、次の時間は教科書のこの部分を学習するのでよく予習をしておくようにと指示をしておいて、その時間には、先ず生徒・学生の質問を受け、その上で、教科書の内容について皆で議論をするというような授業は成り立たないでしょうか。

池田 私たちは、対話型の授業をやっているのですが、それを受ける学生は、先ず、率先して意見を言えねばなりません。それも、言うだけではなくて、周りの人の言っていることをよく理解しないといけない、当意即妙の発言もしなければなりません。それから、自分の考えと相手の考えが、何が共通で何が違うのかをよく解析・理解する能力も要求されます。このような能力は、対話型授業をやる教師も持っていなければなりません。しかし、私自身が受けてきた教育は、先に小学校や中学校の先生方が言われたような、受け身型の授業でした。その私に対話型授業をしているわけです。私自身は、人間というのは、教育の長い効果の中で、徐々に成熟していく部分と、非常に短い期間で変わる部分があると思います。それぞれの部分が具体的に何であるかは、むしろ、このフォーラムの中で検討すべき問題かとも思います。いずれにせよ、実際に非常に短期間でコミュニケーションの仕方、モードをある程度変えることができるのであれば、そういうことは教育の長い効果でないと出来ないと考えて対話型授業をしないよりは、出来るところからやっついこうというふうに、現状を楽観的に見て行動する方が、教育現場のためには良いと思います。大学の現場でも、学生の全てが最初から対話型授業を成り立たせる能力を持っているわけではありません。テレビ番組、NHKの教育テレビのトーク番組などで、若い人たちが意見を戦わせているのを見て、これなら自分もできるのではないかと思っていたところへ、教育の場で実際にそういう機会が与えられたので、実際にやってみた。一度やってみると、面白いのでどんどんエスカレートして行って、やがて好きになるというふうな学生も多いのです。授業を受けている短期間に変わったとも言えます。ここで大事なのは、学校教育であれ、社会教育であれ、どのような教育でもやらなければならないこと、すなわち、学ぶことの楽しさ、あるいは、身につけることの楽しさを対話型授業は提供しているのは間違いないということです。

畑田 只今の人間の人格、性格、特質の変化には、長い時間単位のものと、短い時間単位のものがあるというお話は大変興味深いことですが、私には、長い時間をかけて少しずつ醸成されていたものが、何かの刺激を切っ掛けとして、急に進行したり、あるいは他人からも見えるようになるのだというように思えます。

ところで、このフォーラムの最初で、今の子供は人前で物怖じしないで話しが出来るし、自分の意見が言えるという指摘がありました。対話型授業は意見の言いっぱなしではなく、多様な意見を持つ者のグループの中で、話し合いを重ねて、適切な結論、あるいは進む方向を決める能力を養わせるという、今後の日本にとって大変大事な教育です。只今の池田先生のお話は、対話型教育はやればできるということと、もう一つ大事なことは、学ぶ楽しさを学生・生徒に提供してくれるという、非常に心強いご意見でした。もしかすると、大阪大学だから出来るのだと思っている方がおられるかもしれませんが、私は、池田先生同様楽観的に考えたいと思います。栗山先生、高等学校の現状はいかがでしょうか。

栗山 大阪には高等学校が約150校、支援学校を入れると180ぐらいあるのですが、各校に平均して3回ぐらいは行っておりますので、高校の現状はだいたい分かっているつもりです。先ほどもお話しましたが、今の高校生は、昔の高校生、私が教諭で教えていた20年近く前に比べると、自分を表現する力に優れ、行動力・実行力があります。それで、いろいろとパフォーマンスができます。それからもう1点は、コンピューター操作をはじめとして、いろいろな情報の技術に非常に優れているということです。高校ではコンピューターの授業が必修ですが、この前、授業を見ていたら、私などにはちんぷんかんぷんのことでも、生徒はすぐ理解します。携帯やゲーム機の普及もあるのですが、情報技術の分かり方は非常に早くなっています。どうしてこんなに理解能力が高いのかと驚くほどです。

ただ、これらの今の高校生の特徴には、次のような問題があります。自己表現の力は優れており、パフォーマンスは出来るが、人と繋がるようなコミュニケーション、相互のコミュニケーション

ョンの力が弱いのが問題です。これは、学校によるかもしれませんが、一般的にはそうです。自己表現が強すぎて、他人との対話能力を磨く機会が少なくなっているのかなとも思います。

もう一つは、中学生も高校生もそうなのですが、情報の技術力が非常に高くなって、コンピューターを使った読み書きは何不自由なしに出来るのに、反面、読み書きの根本になる勉強、たとえば、読書量は昔に比べるとはるかに落ちているということです。殆どの子供が本を読んでいない。たまに読んでいても、所謂ライトノベルといわれているような若年層向けの小説しか読んでいないことが多いと思います。長い文章、難しい文章を読む子供は非常に少なくなっています。これは、明らかに今後速やかに解決していかねばならない情報教育の負の側面です。

それから、先ほど話の出た対話力を向上させるための対話型授業に関してですが、日本の子供たちの対話能力は、昔も今もそれほど高くないのです。対話型授業の効果は人数によります。今の高校1クラス40人は多過ぎます。40人クラスでは、全生徒と教師との質疑応答すら、なかなか難しい。やはり、10~20人クラスが、必要なかなと思っています。ただ、現在どこの高校でも、実験的に少人数授業をやっています。1クラス20人で授業をすると、英語の授業などでは生徒の質問も増えて、かなり双方向型になります。数学の時間でも同じです。中学でも事情は大体同じだと思います。教員の数が少な過ぎるというのが日本の教育の大きな問題点だと思います。

畑田 大変重要なお指摘を頂きました。一つは、自己表現力の向上を対話能力の向上に繋げようということです。2番目は、自己表現の方法の一つである情報技術の根底にある読み書きの力の養成を忘れてはならないということです。読み書きの能力はあらゆる授業の基礎となる力です。生徒の情報技術の力を上手に活用して、生徒の読み書きの能力を高める授業が出来れば素晴らしいと思います。私自身は、このような授業が、これからの日本の教育で非常に大事な、根本原理の教育の切っ掛けになればと思っています。高専の先生から「最近の生徒の中には、電卓は人間が考えた計算法の根本原理を素早くやってくれる機械であることを忘れて、電卓がなければ計算は出来ないと思こんでいる者がいる」という話を聞きました。今の栗山先生のお話は、我々はこのような事態を嘆く必要は毛頭なくて、希望を持って前進すれば良いのだということ強く語りかけていただいたと思います。対話型授業は、それが、たとえ実験的であるにせよ、すでに始められています。根本原理の教育の必要性も、あちこちで叫ばれているのです。

それから、クラスの人数の問題ですが、これは教員の数を増やさないと解決できないのですが、この点は、教育委員会の戸川さん如何でしょうか。

戸川 教職員定数とクラスの人数は、義務教育に関しては、公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律で決まっております。それ以外に、大阪府教育委員会から教職員数の若干の加配があります。高等学校については、公立高等学校の適正配置及び教職員定数の標準等に関する法律で定められています。

畑田 それは何名ですか。

戸川 小学校の標準は1クラス40名ですが、1、2年生については35名学級になっています。財政が非常に潤沢な市町村では、独自に教員を雇って、更に少人数クラスにしているところもあります。

5. 学ぶ意欲を如何にして引き出すか—問題に基づく学習 (PBL: Problem Based Learning)

畑田 ところで、対話型授業は少人数クラスの方がやり易いのは間違いないと思うのですが、それだけで解決しない問題もあると思います。如何でしょうか。

戸川 子供たちに意欲が無ければ、教員がいくら一所懸命になって子供たちを指導しようとしても、新しい教育方法を編み出しても、学びは成立し難いということです。このことは、昨年度、学校現場に出たときに非常に強く感じました。今の日本の社会で生活するのに、よほどのことがない限り、食べるのに困ることはありません。私が子供の頃は、学校を出て、良い会社に入って、立派な仕事をしようというような、社会共通の人生の目標、到達点がしっかりと見えていたように思います。今は、それぞれの子供にも家庭にも、共通の目標のようなものは無くて、価値観が非

常に多様になりました。そんな中で、なぜ学ぶのか、なぜ学ばなければならないのかということ、子供たち自身がしっかりと捉えきれなくて、勉強に身が入らない。

以前、私が中学校の現場にいた時に、父親の仕事の関係で、海外から家族と一緒に来日した子供を教えたことがあります。その子供が最初に私に言ったことは、「日本の子供は何故こんなに勉強しないのだ」ということでした。その子には、勉強して、学力をつけて、学歴を上げていくことが自分の成功につながるという生きるための目標がしっかりと見えているのです。だから一所懸命勉強するのが当たり前なのです。日本の子供たちは、勉強しなくても、食べてはいけると考えて、勉強しないのだとは言い難くて、困りました。

まずは、子供たちが、自分の人生の目標、学ぶことの意義をしっかりと身につけなければならない。そのために、子供たちに適切なモデルを提示しなければならない立場にある教員、家庭、社会が、その役割を果たし切れていないというのが現状です。この難局を早急に打開する道を考えるのが我々教育関係者の使命だと思います。

畑田 これまで比較的単一の目標、価値観を持って進んできた日本が、多様な価値観を持つ社会に変わりつつある過程で直面している問題をご指摘いただきました。学ぶことの意義だけではなくて、生きることの意義が分からなくて学ぶ意欲も出ないという若者もいるようです。これらは、それだけでフォーラムを組めるような大きなテーマです。この問題の根本的な解決法は、一人一人の大人が子供のロールモデルになる努力をすることだと思うのですが、これとて、そんなに容易なことではありません。ただ、私は、この問題に関しても悲観的ではありません。先日、豊中ロータリーの教育フォーラムで、中学生が、「勉強をしているうちに、何故勉強しなければならないのかが見えてくると期待して、今、一所懸命勉強している」と言ってくれました。また、高校生は、「最初は勉強して、良い会社に入って、いい給料もらおうと思っていたけれど、勉強しているうちに、勉強というのはやっぱりそんなものではない、自分の好きなことを一所懸命勉強して、その成果を世の中のため、日本のため、世界のために役立てるのが、勉強することの目的であるということが、この頃だんだん分かってきた」と言いました。その後で、大学生が、「周りに、全然勉強をしない、何のために大学に入ってきたのかよく分からない学生が一杯いる」と言ったものですから、少々、ひんしゆくを買ったのですが、それはともかくとして、私が言いたいのは、子供でも、真面目に考えている子供は、なぜ勉強するのかというようなことを真剣に考えているということです。だから、そういう子供に先生が一寸したヒントや励ましを与えてやれば、意欲が高く自立の出来る素晴らしい子供に成長すると思うのです。全体の底上げはもちろん大変大事なことです。真面目に努力している力のある子どもの能力を最大限に伸ばしてやるのも、また大事なことだと思うのです。その上、同じグループの中で素晴らしく成長した仲間をロールモデルとして他の子供たちも意欲的になり、成長する可能性があると思います。まさに一石二鳥です。先生の学校での努力だけではなく、家庭や地域社会の人々の努力も重要です。ただ勉強しろと言うだけでなく、勉強の成果が自分たちの、そして、世界の人たちの幸せ、平和に繋がるのだということをお話し、説明することが大事なのです。ひとこと言えば、大人が子供たちのしっかりしたロールモデルになる努力をすることです。それからもう一つここで言うべきことがあります。それは、先程も一寸申し上げましたが、対話や議論は知識が無いと成り立たないということです。対話型授業は蓄積した知識の活用練習でもあるのです。対話中に自分が特定の分野の知識に欠けていることに気づくことがあります。子供たちが、対話型授業なり、あるいは皆と一緒にワイワイと話し合っている時に、勉強の必要性に気付くこともあるのです。「あっ、自分はこれを勉強しておかないと、こんな場面で発言できないなあ、と気が付いて、勉強しました」と先ほどお話ししたフォーラムで高校生が言いました。それから、「これを今勉強するのは、自分にとっては難しすぎるので、今は覚えておいて、大学に入ってから勉強しようと思うこともある。私は、大学でこういうことを勉強できると思って大学に行くのです」とも言っておりました。こういうことを言う高校生もいるのです。こういう学生を大学は、上手に導いて欲しいと思います。

池田 そういう学習法をプロブレム・ベースド・ラーニング (PBL: Problem Based Learning 問題にもとづく学習) といいます。(<http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/061127pbl.html>) これは、医学、歯学、看護学、環境科学、法律実践、工学など実践の場での問題解決が職業的スキルとして重要視される教育課程でしばしば採用されるもので、小グループで自発性と自己評価によって特定の問題にもとづいて学習をする方法です。最初に始めたのはカナダの小さな医学校です。カナダやアメリカの医学部は大学院大学なので、こんな抜本的で過激ともいえる改革が出来るのです。まさに革命的な方法で何も教えないのです。5人から6人ぐらいのグループを作って、一学期中グループで学習するのです。グループごとに1人のチューターが付くのですが、学術的なアドバイスは一切しない。学習は段階的で、いちばん最初に学生に渡される指令書には、たとえば、10歳の小学生の子供がお母さんに連れられてきて、ずっと頭痛と吐き気がすると訴えている、というようなことだけが書いてある。学生は、このことについて、グループで討論し、1週間の間に、これから我々は何を勉強しなければならないかを、皆で手分けして、インターネットや24時間開いている大学の図書館で調べ、データを持ち寄り、話し合い、相談をします。この討論の後で、子供の患者の更なるデータが提示されます。このようなやり方で学習が進められ、最後に、実際の現場で使われている臨床データが示されます。何故こんなことをやるのかというと、現在の医者に要求される専門家としての知識は、膨大な量であること、人間は基本的には、自分の経験を通して学び、学習して成長していく存在であるということ、それから、医療の臨床現場というのは、特に大病院では、チーム医療であるというのがその理由です。チーム医療では、1人では何もできない。だからといって、1人1人がやらないと何も進まない、グループでやるのではない、1人でやるのでもない、1人でやりながらグループでやるという仕方です。こういう職業現場では、コミュニケーション力が非常に大事です。それで、具体的にコミュニケーションして学習するという教育方法が生まれたのです。

実は、この様な学習方法は、1960年代の終わりから70年代の初めにかけて、社会の既存の価値観や慣習に反抗する文化・生活様式いわゆる反体制文化(カウンターカルチャー)の時代に、小学校の現場でも試みられたのです。しかしながら、こういうリースクールの流れにつながるような考え方は、現実の制度的な学校教育の中からは次第に後退し、現在は、一部の私立学校にかろうじて残っているという状態です。でも、大学院生の様に一定の知識がある人たちにとっては、先ほど畑田先生や栗山先生のお話の中にもありましたように、非常に効果のある学習法です。知識を身に付ける、知識を自分の中に蓄積するだけでは、その知識が持っている力の10分の1も発揮できないが、それを他人に言うことで、自分がどれだけそのことに熟知しているかということがモニターできるし、自分が勉強したその知識を他人と共有することで、知識がグループ、あるいは、社会の知識として共有され、それを通して、自分が学んだ知識が社会の発展につながっているということが自覚できるのです。自分自身の学習と社会の発展との有機的なつながりの可能性が見えてくるのです。勿論、いろいろな障害があって、プロブレム・ベースド・ラーニングの先が全てバラ色というわけではありませんが、その可能性はかなり高いと私は思います。

畑田 これからの日本の教育の進むべき方向について、非常に大事なご指摘を頂きました。プロブレム・ベースド・ラーニングが、一定レベル以上の学生にとって非常に役に立つということは、誰でも分かるのですが、日本ではなかなか踏み切れない。私は、プロブレム・ベースド・ラーニングの基本理念は総合的な学習のそれに良く似ていると思うのですが、これも現在、若干後退気味です。先日、インド人の留学生が言っていたのですが、「インドでは、大阪大学に来るぐらいのレベルの学生に対して、日本のように教師から学生への一方向型の教育をすることはしない。知識の習得は1人で出来るので全部家でやる。学校では皆と一緒に議論をして習得した知識を深める。それが学校の役割である」と。学校というのは、皆と一緒になければ出来ないことをやる所だということです。最初に話の出たような、一緒にいても、1人はテレビゲーム、1人は読書、1人はテレビ、でも、一緒に居ないと何となく不安だというような集まり方では、対話能力も知識も深まらないというわけです。

池田 教育は個人個人に知識を注入するのか、それとも、グループで知識を蓄積・共有・深化していくのかという二元論だけで説明出来るものではありません。実践共同体の理論とか、発達の最近接領域の理論とか、旧ソビエトの学習理論では、人間の学習能力に関して、1人で学ぶのではなくて、生徒たちが単に教え合うというのではなくて、学校の中で、先生が皆と一緒にあって教育の場を設けることで、学ぶ効率が非常に上がるというふうに考えられています。学校教育の中で個別に生徒の資質を上げるために一番良いのは、単純にマンツーマンで、家庭教師的に、先生1人に生徒1人というのが最上の教育のように思われることがあるのですが、それだけで生徒の資質が最高になるのではなくて、みんなが集まって、集まるといっても100人では多すぎる、14人とか15人かもしれない、教えることによって5人位が良いかもしれないのですが、とにかく皆が集まって教育を受けることによって個人の資質が向上するという面もあるのです。ただそれだけで問題が整理できるわけではありません。生徒に注入される知識に関して、頭で理解するだけではなくて、手計算などの様に体を動かしたり、あるいは皆が教え合ったりするという、個人の知識の習得という観点からは一見無駄なように見える部分が、その人たちの学習能力や知識習得に対する意欲に影響を与えています。教員が、直接には、実効があると思ってやっていない影の部分が、実際には、教育に非常にポジティブな貢献をしているということがあるのです。まだまだ分からないところが沢山あって、個人教育か、グループ教育か、あるいは創発的なグループ教育でいろいろなものが生み出されるような授業がいいのかということになると、単純に割り切った答えは出しにくいということをご理解いただきたいと思います。

畑田 教育に限ったことではありませんが、特に教育の問題を単純に二元論で片付けようと思っておられる方は、少なくとも、この会場にはおられないと私は思います。ただ、今の日本で、学校教育の評価や将来展望のかなりの部分を数値で表せる成果で片付けようとする傾向が強いのは、変えねばならないと、私は思っております。

6. 教育理念の学校現場での実践—対話型学習と総合的な学習の活用

畑田拓男（郡市区長） 今、議論しておられることは、私には、あるレベル以上の生徒に対するものであって、レベルを0から100までであるとすると、たとえば、60から上のレベルの生徒の話であって、それよりも下の生徒のことは無視されているように思えます。

畑田 必ずしもそうではないと思います。対話型授業は、通常の授業よりは、いろいろな意味でレベルの広い範囲の生徒に適用出来ますし、プロブレム・ベースド・ラーニングも、医学部の学生に対するものを例にして説明されたので、難しい話になりましたが、その基本理念は広い範囲の学生に適用できるものだと私は考えています。

畑田拓男 私にはとてもそうは思えないのです。これは、20年ぐらい前に私が高校の教師をしていた時のことではありますが、ある高校では50分の授業が成り立たないのです。栗山先生の春日丘高校ではそんなことは無いでしょうが、50分間の授業を辛抱できない生徒が大部分というような高校もあるのです。

栗山 私も今、授業時間に関連させて、学業のレベルや興味の対象の範囲の広い高校の生徒に、どのように対処するのが良いのかについて意見を言おうとしていたところです。現在は、高校の授業は50分と決まっているわけではなくて、いろんなパターンがあります。75分のところもあれば、90分もあります。25分でもよいのです。授業時間の長さは、高校で自由に決めることが出来て、極端な場合15分でも良いのです。それで、私が言いたかったのは、どの高校の生徒でも良い面があります。いろんな学校がありますから、良い面はそれぞれに違うとは思いますが、とにかく、どんな生徒でも何か良い面は持っている。それを伸ばしてやることを考えればよい。先ほどの私の話で言えば、今の生徒は自分を表現する力がある、それをどう伸ばせるかいうところに、教育のありかたを持っていかなければならない。それも一律にやるのではなくて、自分を表現する力の弱い生徒には、それをもっと高めてやる必要があるし、既にある程度のレベルに達している生徒には、先ほどから話題になっている相互コミュニケーションのところまで広げてや

ればよい。教育はいくつかの段階を経て達成されるのですが、全ての生徒が最後の段階まで達する必要はないと私は思っています。情報技術の力にしても、これを伸ばしていくと同時に、欠けているもの、すなわち知恵の基盤と言えるようなものを少しずつ学ばせてやればよい。生徒の良いところ、プラスの面を少しずつ高めつつ、それを利用して、欠けているところを補い、これからの生活に必要な力を養う方向に導いてやる、このやり方は生徒の成績にはあまり関係なく、応用出来ると私は思っています。先ほどからのお話は、成績の高い子だけの話ではないと考えて聞いておりました。

畑田拓男 私は現場を離れてからかなりの年月が経っているので、現状の理解が不十分ということはあるかもしれませんが、ただ、私には、50分の授業が成り立たない学校で、授業時間を30分とか、20分に短くしても、今ここで話題になっているような対話型授業の教育が成り立つとは思えないのです。このような子供に対してどのような教育をするべきか、どう対処するべきかを、ただ授業時間を短くするというような単純な発想だけではなくて、もっと真剣に考えるべきだということを申し上げているわけです。

池田 非常に大事なご指摘なのですが、そういう方法論が未だ確立されていないというところに一つの原因があるのかも知れません。

それから、対話型の授業は50分授業に耐えられないような学生には適用できないというご意見ですが、これは、先ほど畑田先生からもご指摘がありましたが、そうではないと思います。現在の大学での対話型授業は、教授が学生や大学院生を教える、あるいは知識を伝達するというイメージを徹底的に破壊するものです。対話においては教員も学生もみんな平等で、お互いに「さん」付けで呼びます。それから、教員にも学生たちにも「教授は何かを教えてくれるに違いない」というような偏見がある。これがあると、変な話かもしれませんが、教授に対して「先生は知っているけれど私たちは何も知らないのだ」みたいな感情が、反抗と言えるのかも知れませんが、必ず起こるのです。それは、皆が対等でないからです。それと、対話は一種のゲームみたいなもので、対話型授業はゲームから学ぶ授業ということもできます。偏差値の高い大学の方が段取りよく授業が出来るのは事実ですが、さまざまな偏見を取り除いて、完全に対話ベースで授業を行うと、どんな大学でも最終的には同じようなところに着地します。入学時の知識量に大学による違いがあるというのは、畑田先生が言われる、点数によって選別する入試制度を採る以上は、やむを得ないことで、これを卒業時にはどの大学の学生も同じ水準にするというのは、教育法だけでは不可能に近いことです。しかし、大学に来て授業を受けて面白いとか、自分のためになったというふうに成長するのは、偏差値には全然関係ないと思います。もう一つ大事なこと、これは教育する側が完全な意識改革をしないといけないことなのですが、教えるのではなくて、学ばせるというか、学生が学ぶのが大事ということです。教員や知識の高い学生ほど、学習するということ、勉強するということから、学ぶということに頭を切り替えるのに、逆に時間がかかるのです。変な話と思われる方もあるかもしれませんが、ヤンチャで集中力がなくてふらふらしている者、あるいはそういうグループの方が、対話型授業の学習効率、あるいは満足度、授業の最終的な満足度が高いということもあるのです。グループ学習というのは、我々が想定する以上に教育上の潜在力があるということを書いて置きたいと思います。

畑田 私は大阪大学を定年退官して13年になります。その頃は対話型授業などほとんど行われていませんでした。でも、卒業して会社に入ると、特に、あまり大きくない会社や、合弁会社では、入社後しばらく経つと、自分で対話型学習をせざるを得ない立場に追い込まれるのです。そのような場合に、卒業時には成績の悪いヤンチャであった者の方が、生き生きとして成果を上げている例をいくつも知っています。今の池田先生の最後のご指摘は十分に納得できました。

ところで、今、フロアから発言された畑田拓男氏はこの地区の区長なのですが、彼の発言を聞いていて、私の国民学校・小学校時代のことを考えていました。勿論、入試はありませんから、クラス内の生徒の知識の量とか学ぶ意欲とか、学習成果にはものすごい差がありました。それで、先生がその全ての子供に対応していたかということ、必ずしもそうではなくて、どちらかということ、

一部にはより丁寧に対応していて、他は場合によっては、ほったらかしということもあった様に思います。なかなか九九を覚えられない子供を、一日中廊下に立たせておくというようなことは、行われていましたが、これはあまり効果のある対応策とは思いませんでした。今は、主として一部の生徒だけに対応するというようなことは出来なくて、それぞれの生徒の個性を尊重した教育に、教員は必死に努力をしている。でも、先ほど池田先生が言われたように、入学時にいわゆる偏差値とかいろいろな面での能力が違う生徒を卒業時に同じにするというようなことは不可能に近い。ところが、一部の保護者や社会はそれを求めている、それが出来ないのは教育が悪いとさえ言いかねないようなところがあります。それと大事なことは、全体の底上げはもちろん非常に大事ですが、それに時間を割き過ぎて、その中の一部の生徒が持つ素晴らしい才能を伸ばすのを忘れてはいけないということです。この辺の問題をどう解決するかというのは、今の教育界の大変難しい課題だと思うのですが、公立と私立の両方の学校を良く知っておられる大友先生、いかがお考えでしょうか。

大友 ご質問は、これから十分に議論されなければならない内容だと思います。私は、長い間、公教育に携わってきたわけですが、実は先ほどから対話型授業の話聞いていて、教員がいかにか学んでいるかということが非常に大事なポイントだと思います。総合的な学習の時間が導入された時に、同時に「ゆとり教育」がキャッチ・フレーズになったのが、まずかったと思います。この言葉の本当の意味を、学校の教員も含めて日本国民の多くが理解できないままで、総合的な学習が始められ、その後、学力の低下が全てゆとりの教育に原因があるというような雰囲気になってしまいました。それで、再び知識の詰め込みという程ではなくても、知識量を増やす教科書を使おうという動きになりつつあるわけです。総合的な学習の時間は、皆で課題を見つけて、それを皆で勉強しながら解決していく過程で、1人1人の子供の持つ能力、特質を向上させていこうという教育方法です。小学校では割合うまくいったのです。それは先生方が、常に子供たちの中で課題を見つけながら動いてこられたからではないかなと思うのです。だが、中学校では成功しなかった。今も細々と続いているところもあるとは思いますが、一般的には上手くいかなかった。その理由は、各教科型の教員です。ほとんどの教員が、理科は理科、数学は数学というふうに、自分の専門に特化した科目を教えている、まさに教える一方の教育です。そういう授業形態が原因だと思います。皆でテーマを選んで、先生も一緒になって皆で考えるという、授業形態に馴染めず、私も含めて教員が混乱したのです。中学教員にとって、そういう授業を構成することが非常に難しかったのです。そういう中でも、文献を調べたり、いろいろな経験をもとにして、上手く授業をした先生もありましたが、大部分の先生は上手には出来なかった。上手に出来た先生は、自分の専門以外のいろいろな分野に関わる学習をしておられたのだと思います。子供も、総合的な学習の時間に、いろいろな対話形式の、あるいは集団討議の場面で多くを学んだと思うのです。私は今でもこの総合的な学習を中学校でもっと活用した方が良いと思っております。こういう形式の授業で、生徒が多くを学べるためには、学びの基礎になる知識が必要なのは、先ほどから話しが出ている通りです。子供の年齢やいろいろな能力に応じて、どのような知識をいつ習得させるかという教育的指針は、まだ作られていないように思うのです。この点は、今の日本の教育が、随分立ち遅れているところであるというのが私の実感です。

私は公立から私立に変わって今年で3年目です。私学の生徒は高い授業料を払って、その学校に特徴的な教育を求めて来ている点が公教育とは違います。ある意味では範囲の狭い生徒の集団です。だから、生徒のばらつきが少なく、いろいろな形式の授業がやり易いという面があります。私共の学校は、外国人の教員を沢山採用して、かなりのレベルの英語教育をやっており、成果も上がっております。このようなレベルの高い英語教育を公教育の中で、全生徒を対象に行うことはかなり難しいと思います。生徒数の問題や教員の能力の問題も関係するとは思いますが、根本的には生徒の能力の幅の問題だと思います。これまでの日本の教育は、一本道というか、非常に均一な方法で進んできた。順番に階段を上がって行って、良い学校を出れば良い会社に入れて、良い生活が出来るという考えで貫かれた一本道を進んできたような気がするのです。今、社

会の価値観が非常に多様化している中で、教育はそれに対応しきれていないと思います。私たち教育界にいるものが、もう少し頑張らなければいけないと、今は思っております。

畑田 家庭、社会の価値観の多様化に、教育が対応しきれていない、教育者の教育理念や教育方法の多様化が必要であるというご意見です。至極当然のことではあるのですが、具体的には、公立と私立、あるいは、既存の枠組みにとらわれずに、それぞれの学校が、我々はこういう生徒・学生をこういう理念に基づいて教育する用意があるという主張を明確にして、生徒を募集することにしてはどうか、と私は思います。ここでは、先ほどから話しの出ている情報技術が大いに活用できると思うのです。そして、いずれの学校でも総合的な学習が大いに活用されるべきだということを、大友先生は仰って頂いたのだと思います。

疋田 私学の立場からお話をされましたので、私は公立の立場から少し視点を変えて話をしたいと思います。私学との大きな違いは、公立には地域の中の学校だという意識が必要だということです。たとえば、私が昨年まで勤めていた古市小学校は、古市という校区の中であって、お父さんお母さんは古市小学校の卒業、お爺ちゃんも古市卒業やという、この畑田家のある丹比小学校もそうだと思いますが、そういう地域の中に学校が存在しているということなのです。公立の小学校は予算の面では私学に劣ります。その代わり、地域のいろいろな分野の有能な人材という財産があります。先ほどから話題になっている総合的な学習に、これらの方々に支援・協力していただいております。古市には、いちじくを作っている人がいる、隣村の駒ヶ谷には、ブドウを作っている人がいる、こういう人たちに学校に来てもらって、子供たちとの話し合いを通して、働くことの大切さ、仕事に対する誇り、どんな思いで大人は仕事に頑張っているのかというようなことを、子供たちに感じ取ってもらう。こういうのは、公立のすごい良さだと思います。これに関連して、今、子供たちが意欲をなくしてきているということも含めて、大人の教育上の責任というか、教員、家庭と地域の大人の責任と使命について、後半でお話ししたいと思っています。

畑田 公立学校は、地域に密着して生きているのが大きな特徴であること、そして、総合的な学習の理念を保ちつつ、これを地域の人材の支援による出前授業と組み合わせて、教育効果を上げているというお話でした。

7. 子供たちの学習意欲をどのようにして向上させるか—ハードルを乗り越える快感

畑田 ところで、かなりの子供たちが、いろいろな面で意欲をなくしているのは、何が一番大きな原因なのでしょう。今思えば、私の小学生のときも、意欲の低い子供はかなりいました。ただ、意欲があろうがなかろうが、やらざるを得ない環境でした。だから、あまり問題にならなかったのかもしれませんが、今は、意欲のない子供をそのままに置いて置くと、何もしないで座っている。それでもいいよ、という訳にはいかないの、先生は意欲の多様化への対応に苦労しておられる。多様さの幅は今の方が広がったかもしれませんが、昔も子供は、今ほど2峰性が強くなかったかもしれませんが、多様でした。昔も子供は全て個性を持っていました。その個性を伸ばすのは、個人の責任というふうに考えられていたと思います。個性は人に伸ばしてもらうものではない。意欲が無くてもやらざるを得ないというような環境に代わるものとして、どのようなカリキュラム、教育方法が良いのかを考えねばならないということだと思うのですが、如何でしょうか。

安部 非常に難しい質問です。子供に勉強の意欲づけをするのは難しいのです。3年前から、全国学力学習状況調査が行われていますが、大阪は非常に悪い。昨年、体力調査をやったらこれも悪いということで、知事が勉強も出来ない、運動も出来ない、一体大阪はどうなっているのか、とご機嫌斜めなのです。それはともかくとして、大事なことは、学力をどう捉えるかということです。保護者も含めて世の中の人、テストの点数が高ければ学力があるという捉え方をすれば、実際はそんな簡単なものではありません。目に見えない学力というか、思考力、判断力など点数では表示し難い力も、重要な学力として認識されなければなりません。そのあたりの力をどんなふうにつけていくか。授業で、先生から知識を詰め込まれるのは、生徒にとってはあま

り面白くない。逆に、子供が自分で興味を持って言い出した問題について、先生と一緒に考えているというような授業なら、意欲的に学習するし、最後の成果は間違いなしに、生徒の力となって残る。こういう授業は生徒にとって非常に面白いのです。総合的な学習の理想的な姿ともいえますし、子供たちの知識レベルが上がってくれば、先ほどから話題になっている対話型学習に繋がっていくのだと思います。いわゆる教員主導型の授業とともに、生徒から提起された課題について教員と生徒と一緒に学んでいく形式の授業を少しずつ増やしていく必要があるという考えが私共の小学校で起こりつつあります。おそらく、羽曳野市の他の小学校、中学校、あるいは他の市町村の学校現場でも同様でないかなと思います。このような取り組みを地道に続けることで、授業は中身の濃いものになり、子供たちのいろいろな物事に対する関心、意欲が高まって、思考力、判断力、表現力が養成されると思っています。

畑田 子供たちの意欲を上げるための現場の取り組みについて、素晴らしいお話を頂きました。先ほどの20分間の授業にも耐えられないというような子供でも、この方法で地味に努力すれば、授業が受けられるようになるのではないかと、私は思います。ただ、この様な教育法に転換するには、カリキュラムを少々変える必要があると思います。その時に、国の規制の枠を越えるので実行できないというようなことがあると困るのですが、私学に対しては、そういう規制は無いのでしょうか。

大友 規制は公立よりはゆるいと思いますが、一定の基準はあります。

畑田 それともう一つの問題は数値で表される学力ですが、OECDによる国際的な生徒の学習到達度調査 (Programme for International Student Assessment, PISA) の日本の順位があまり芳しくないということがいつも問題になるのですが、これでいつも上位のフィンランドは、所謂ゆとりの教育の国なのです。知識詰め込み型の教育をやっているのではないのです。ゆとりの教育で、成績が高いのです。

大友 その通りです。これに関して一つお話しして置かねばならないのは、北欧の教育制度では、ある学年の授業内容をクリア出来なかった場合には、原級に留まることが出来る。それで、修得レベルの非常に低い生徒が進級してしまうのがある程度防止出来ているのです。これが成績の平均値の向上に役立っているのかもしれませんが、日本でもできなくはないのですが、実際は、特に、小学校、中学校では、殆ど進級させてしまいます。

畑田 原級留め置きが実際には出来ないということが、生徒のいろいろな意味の学力の2峰性の増大、2極化に関係しているのかもしれませんが、うちの子供もアメリカに住んでいた時に、英語が出来ないので、先生から相談があって、小学校6年生で1年留め置きになりました。この小学校では、通常のクラスのほかに、4、5、6年生混合クラスや5、6年生混合クラスなどあって、原級留め置き生徒が目立たないような配慮がしてあるのと、教員も一つのクラスに一人のAce-teacherと教育学部学生のSub-teacher二人がいるなど、急に外国に来たうちの子どもたちにとっては、大変幸せでした。

ところで、日本では、この原級留め置きが大変し難いのですね。

久堀 私の理解では、義務教育の中に、年齢主義と課程主義という二つの考え方があって、日本は原則的に年齢主義をとっているのです。だから、早く言えば、分かるが分かるまいが、年齢が上がれば進級し、卒業していくというシステムです。課程主義の国では、正規の年数は6年でも、ある程度の学習をしていないと、8年、あるいは9年掛かって卒業するということもあるようです。ただ、そういう国でも、一定の卒業年齢の上限は決めてあるようです。

ここで、先ほどの子供の学習意欲の話について発言させていただきたいと思いますが、子供に勉強に対する興味を持たせる、あるいはその動機付けをするためには、どうしたらよいかということです。子供にとって学びというのは、本当は楽しいことで、本来は面白いことの筈なのです。学齢期前の小さい子供でもそうですが、何かを学習して、それまで出来なかったことが初めて出来るようになって、それで、褒められたり認められたりして、嬉しくなり、それが刺激になって意欲を高めていくのです。でも、これはある一定の年齢までで、それ以上の年齢で、学びに対す

る姿勢を積極的に持ち続けるための動機付けをしてくれるのは、私は、乗り越える快感だと思うのです。何かの場面、条件、あるいは問いがあって、それがよく分からないときに、たとえ他の助けを貰いながらも乗り越えたとき、答えが見つかったときに感じる嬉しさ、快感、面白さ、これが勉強の面白さであり、次のステップへの意欲を高めてくれるのだと思います。ここで、指導者にとって大事なことは、それぞれの子供にとって、どのようなハードルが適切かを、常に考え、提示してやることです。そうすれば、子供はそれを乗り越える快感を得て、さらに、意欲を高めて次の問題に向かっていくことになるはずだと私は思います。

もう一つ2極化の問題ですが、今、日本では、ここに居られる皆さん方が想像される以上に、2極化が進んでいます。今、自分の目の前で行われている授業が全く分からないという子供もいるのです。それで、公立学校は、疋田先生が言われたように、地域に根ざして、全ての子供たちに公教育を提供するというのが使命ですから、まず、基礎学力というか、どの子供にも分かるようなことをしっかりと身につけさせることに重点を置かねばなりません。そうすると、ほとんど全ての子供たちに乗り越えさせるために、いろいろなハードルを細やかに設けてやる必要が生じて、カリキュラムが非常に多様化するという、難しい問題が生じてくるのです。この解決法は、先ほど意見が出たように、教員の数を増やして、双方向の授業も成立するような環境を現場に作るしかありません。大変難しい課題ではありますが、私はそれしかないと思っています。

畑田 「ハードルを乗り越える快感」、問題の解決法を大変上手に言っていただきましたが、その道は必ずしも平坦ではありません。教員の増員の問題は、問題の本質を国民が十分に理解しないと実現しない。そういうことを主張する政治家に国民が投票しないことにはどうにもならないですからね。国民に問題の本質を十分に理解してもらうためには、先生が保護者や社会に働きかけていただくのが一番だと思うのですが、これもいろいろな事情があって、なかなか上手くいかない。明治政府が言いだして、最近では麻生首相が唱えた国民皆学の精神を何とかして日本中に浸透させることが必要だと、つくづく思います。参考までに、国民皆学の必要性は教育基本法の第3条に明記されています：「国民一人一人が、自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図られなければならない」。

それから、教育界での2極化の問題が何回か話題になっているのですが、これは教育内容の質と量の高まりに伴って、必然的に表れたという面があって、これを教育方法やカリキュラムでどこまで是正できるかというのは大変難しいことなのですが、今のご意見は問題解決の一つの糸口を与えていただいたと思います。私が考える2極化に対するもう一つの大事な問題は、2極化で上側の存在になったものが、他の者のことをどこまで慮ることが出来るか、すなわち道德の問題が極めて重要になってくるということです。これは経済と道德ということにも関連する非常に大事な問題で、もし時間があれば是非ご討論いただきたいことではあります。

ところで、中国と日本で、先生一人当たりの生徒の数は違うのでしょうか。

袁（中国） 50人位だと思います。

畑田 イランはどうですか。

Afshin（イラン） いろいろあって良くは分かりませんが、平均すれば、大体30～40人位かと思っています。

畑田 平均的には、日本とよく似たものですね。生徒一人当たりの教員の数は、都道府県によって少し違うかもしれませんが、いずれにしても、もっと多いことが望ましいというのが皆さんのご意見だと思います。私の感じでは、余裕を持って教育に当たっておられる先生が少ないように思うのです。

大友 私自身は、今は、時間的には、比較的余裕を持って仕事をしております。それで、教員の数を増やして教員の余裕を確保するという問題ですが、クラス担任と副担任の教員数は学校教育法で決められているので増員はなかなか難しいと思います。しかし、補助教員の数は、市町村の財政に余裕があれば、増やすことが出来るのです。だから、小人数の学級展開は、市町村によっ

てかなり差があると思います。私のいた豊中市の市立中学では、少人数学級編成がかなり進んでいます。ただ、私はクラスの生徒数は、少なければ少ないほど良いとは思っていません。ある程度の規模の人数の方が、授業がしやすいということもあるのです。そのある程度の人数が、30人がよいのか、20人なのかは、難しい問題ですが、今、私が勤めている私立中学校は、25～26名です。この辺りが、英語の授業も含めて、割合授業のしやすい規模のようです。

畑田 私も25～26名というのが、割合授業のしやすいクラスの規模だと思います。余り少ないとクラスの多様性が失われるし、生徒にとっては、英語の授業などでは先生に当てられる数が多くてかなわない、というようなこともあるかもしれません。もっとも、実験を伴う理科の授業などは、もう少し少ない方がよいかもしれません。

8. 教員の人材育成と先生と生徒・保護者間の信頼感の確立

男性 A (八尾ニューモラル) 今の教育で、制度に問題があるのか、制度以前の問題なのかよく分からないのですが、ただ、私の子供のときは、親も先生も怖かった。学校で先生に怒られて泣いて帰ったら、それはお前が悪いからやと、事情も聞いてもらえずに、また怒られた。それほど、親が先生を尊敬していた、あるいは先生を尊敬すべきだということを親に教えられ、子供も先生を尊敬しなければならないと思っていたし、また尊敬していました。今、教育に関して何か問題が起きると、すぐに、親が悪いの、先生が悪いの、政府が悪いのと、何か犯人探しをしているような感じがします。私は、まず先生を尊敬することから始めてはどうかと思うのです。学校で見ていると、先生が、たとえば「整列して静かにしなさい」と言われても、子供は、なかなか言うことを聞かない、もう最後まで聞かない子供もいる。こんなことは、私の子供のときにはありませんでした。親が、先生は偉いのだ、先生を尊敬しなければだめだというふうに、子供を教育すれば、先生は教育しやすくなり、子供も良くなるのではないかという気がしております。

畑田 先生が社会的に尊敬されているような状況を作って、授業をし易いようにしてあげることが大事だと言って頂いたのだと思います。まったく同感です。ただ、それは、親が「先生を尊敬しなさいよ」と言ったり、先生が「私を尊敬しなければ駄目ですよ」と言えば達成できるというような、簡単なものではありません。先生は日々研修に励んで子供との間に信頼感を作り上げ、親・保護者、家庭・社会が学校教育に全面的に協力する体制を作らねばならないのです。このことは、教育基本法第9条及び第13条に謳われています：第9条「法律に定める学校の教員は、自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努めなければならない。2 前項の教員については、その使命と職責の重要性にかんがみ、その身分は尊重され、待遇の適正が期せられるとともに、養成と研修の充実が図られなければならない」；第13条「学校、家庭及び地域住民その他の関係者は、教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚するとともに、相互の連携及び協力に努めるものとする」。

ただ、私は国民学校、今の小学校5年の夏まで、太平洋戦争だったのです。正規の男の先生がどんどん出征され、教員免許のある女の先生はほんの数名だったので、女性の補助教員の先生が増えました。これらの補助教員の先生に何かを質問しても、答えの帰ってこないことが良くありました。そうだからといって、親が先生を非難するようなことは無くて、母親が（父は戦争に行っていましたので）「自分で調べて先生に教えてあげたらどう？」とってくれました。お陰で、私は自分で調べるといふことの面白さを知りました。今、何故こんなふうに事を運べないのかなと、歯がゆい思いがするのです。こんな時に、親が「先生そんなことも知らないのか」というようなことを、子供の前で言ったらおしまいです。度々、法律を持ち出して申し訳ございませんが、日本国民は、教育基本法第2条第1項の「豊かな情操と道徳心を培う」こと、および、第3項の「自他の敬愛と協力を重んずる」ことを忘れてはならないと思います。これは、自分のことだけでなく、他人のことも視野に入れ、ある程度の寛容さを持って、物事を判断するという、広い意味の道徳の問題です。聞くところによると、中国では今も先生は非常に偉い存在だそうです。

だから中国がどんどん力をつけてきた、というのは少々言い過ぎかもしれませんが、とにかく、日本の先生をもう少し偉い存在にしたいですね。

安部 4月に学校が始まって、保護者の皆さんに校長が話をするとき、必ず1回言うことがあります。それは、「お母さん方、いろいろなことで、担任にご不満のある場合もあろうかと思いますが、それを子供さんの前では言わないようにして下さい。何か問題がありましたら、どうぞ校長の方へお願いします」ということなのです。それでも、帰りに下駄箱の前で、「今年の担任は外れだ」とか、「えらい担任に当たった」とか、そんな話ばかりしておられる。それを子供が聞いているのです。それで、家に帰ったら、多分、子供が親に「今年の担任の先生は、外れか」と聞いているのです。「そんなこと、頼むからやめて欲しい」と言うのですけれども、どうにもならない。何が原因でこんなことになったのだろう、何時頃から教師に対する信頼感が落ちて来たのかなと自問自答するのです。答えを出すのは非常に難しいのですが、一つは、マスコミの教員叩きです。もう一つは、私が30数年前教師になった時には、子供と遊ぶ時間がたくさんありました。放課後子供と一緒に野球をしたり、魚釣りに行ったり、いろいろなことをしました。今は学校現場には、放課後、子供と話をする時間もないのです。チャイムが鳴ったら子供は家に帰りなさい、学校に残ってはいけませんということになります。子供と教師との心の接点が出来ない、これが出来ないから、信頼感も出来ない、それで、親との間の溝もどんどん深まっていくという状態です。以前のように、子供の心を教師もよく聞いていたから、「お母さん、お宅のお子さん今こんな状態ですよ、よく聞いてあげてください」と先生が言い、お母さんが「ああ、先生どうも有難うございました」と応じるというのが正常な状態だと思います。今は、子供が学校の運動場でこけて一寸怪我しただけで、運動場に穴があるのが悪いとか、子供に怪我させてどうしてくれるのか、というような話ばかり目立つようになりました。このような状態を解消するために、学校もいろいろと努力し、発信もしているのですが、上手くいかないというのが現状です。

畑田 教師と子供、教師と親の間の信頼感の構築に、現場の先生方が苦慮しておられる様子がよく分かります。それと、マスコミの影響の話ですが、これも、世間がマスコミの報道を無批判に受け入れるためというか、受け入れざるを得ない不勉強の所為というか、所謂、国民皆学にかかわる問題なのです。ただ、子供の親も、学校教育から生まれたものなのです。どこかで、この悪循環を断ち切る以外に方法はない。

安部 その通りです。

畑田 そうすると、小学校から一所懸命に問題解決の努力をするしかないということになってきます。やはり、限りある予算をどのように使うかを良く考えて、人材育成に出来るだけ多くの予算を振り向けるということではないでしょうか。

戸川 教育委員会に勤務している者として、今のお話に関する先生方のご苦勞は、本当によく分かります。日々、保護者の方から担任や学校長を通り越して、いきなり私のところに来るのはまだ良い方で、「教育長を出せ」とか、「市長を出せ」とかというようなクレームの電話が、どんどん入ってくるような現状です。この問題に関して、私が感じていることは、以前には無かったことですが、企業の論理である顧客満足度のようなものが、教育を考える場に持ち込まれてきて、それが学校教育の中身を測る一つの視点になっているということです。だから、学校について何か満足出来ないことがあれば、客である親は、当然その改善のためにもものを言う、それが当たり前だというよう考えが、一つの大きな流れになってきているのかな、ということです。

それから、先ほど畑田先生が言われた人材育成ですが、これには、教職員の年齢構成が大きな課題になっているように思います。今から30数年前に、非常に多くの先生が採用されました。いわゆる団塊の世代の人たちです。ところが、その後、数年してパタッと採用が無くなって、ある特定の年代の人たちが欠けているという状態になりました。羽曳野市でも、実は、48歳の教員が0という状況なのです。このような教員のいびつな年齢構成が、若い先生がベテランの先生から実務を通していろんなことを学んでいくというタイプの研修を行い難いという状況を招いていると思います。新任の先生は4月に初めて学校に入って、4月8日から、いきなり授業を持ち、

子供の指導をするわけです。新任の先生も、30 数年のベテランと同じ土俵でスタートしなければならないという状況が、ここ数年続いています。先ほどからのお話にもありますように、学校の中に、先生同士でいろいろなことを教え合い、伝え合うというゆとりが全くないままで、新任の先生がどんどん増えてくるという状況です。このような状況では、現場のことが未だよく分からず、経験不足の先生には一寸した失敗が起こりやすい、そうすると保護者がいろいろとクレームをつける、それが若い先生を勇気づけるというようなことはあまりなくて、逆に、自信を喪失させ、活力を低下させるという悪循環が起こりやすい。

一方、採用数の少なかった時代の先生方はとても優秀です。しかし、残念なことに、総合的な学習とゆとり教育の少し前の世代の方なので、いわゆる知識偏重というか、頭はいいのですが、人と交わる力、コミュニケーション力、あるいは集団で何かを一緒にやっていく力が、あまり強くないのです。こういう状況で、今の教育現場では、先生同士のチームワークづくり、集団づくりがあまり出来ていないのです。どこの市町村でも大体同じ状況だと思います。これをどう解決するかが、これからの大事な課題です。今、疋田先生が取り組んでおられるのですが、若い先生を育てていくためには、かなり大きな仕掛けが必要だと思います。未経験の先生の育成に関してもう一つの問題は、先生の一寸した失敗も許さないという親の寛容さの無い態度です。先ほど畑田先生も指摘されましたように、以前は、「まあ、先生若いのだから、一寸ぐらい失敗があってもいいではないか」で済んでいたのですが、今は、大ベテランの先生も、新任 1 年目の先生も全く同じように扱われて、一切失敗が許されないのです。それで、若い先生がどんどん潰れていってしまうというケースが、かなりたくさんあります。こういう状況で先生をどう育てていくかが、本当に重要な課題になっているのです。

畑田 教育現場での人材育成に関して、大変重要なお指摘を頂きました。教育界だけでなく、日本のいろいろな現場で、あまり真っ当でない企業の論理が横行していて、問題を起こしているような気もするのです。まあ、それはともかくとして、教育の場で、何か問題があれば、客である親・保護者が文句を言うのは当たり前で、その解決は企業側である先生や教育委員会の責任であるという、企業の製造物責任みたいな考えで、自分たちは何もせずに済ましていけば、先生が困るだけでなく、一番損をするのは自分たちの子供だということを、日本の親・保護者は理解すべきだと私は思います。でもこれは、教育の世界だけの話ではなく、残念なことに、政治の世界にも、失敗した相手を罵倒するだけで、それを日本としてどう修復すればよいかに思いを致さないような風潮があると思います。政治家も学校教育の成果として生まれたものなので、まずは、教育の世界で、教員、親・保護者、地域の人達、子供たちの信頼のきずなで結ばれた教育システムを作り上げることが先決と考えられます。

9. 原級留め置きを考える

男性 B 北欧やアメリカでは義務教育でも、原級留め置きが可能ということでしたが、日本でそれを導入すれば、OECD の PISA ショックの解消というか、成績の向上は期待出来るでしょうか。

畑田 原級留め置きの生徒に適切な配慮さえなされれば期待できると思います。大学では原級留め置きになる学生がかなりいますが、そういう学生は、先ほどもお話ししたように、卒業後、企業で成果を上げていることが多いのです。

関口 一寸、参考までに申し上げます。フランスでは義務教育は 6 歳から 15 歳までで、小学校が 5 年、中学校が 4 年です。病気などで長く休んだ時に、親が希望して原級留め置きにしてもらうことがあります。逆に、成績の悪い子供は、学校の方が進級させてしまいます。原級留め置きは、それによって効果が上がるということが、はっきり分かっている場合だけ行われるのです。効果の無い原級留め置きは、無意味だというわけです。原級留め置きは無意味と判断された生徒は、成績が悪くてもそのまま進級させてしまいます。日本で考える原級留め置きとは少し違うのです。こういうやり方での原級留め置きも可能だということをお知らせしたいと思います。

栗山 昔、大阪の全部の高校の中退率が全国 1 位、公立高校の中退率も全国 1 位だったことがあ

るのです。その時に、中退率と留年に相関関係があるのではないかと思って調べたら、その通りで、留年生も凄く多かったです。他の都道府県では中退率も留年生も少なかったのです。突出して留年生が多い大阪が、突出して成績が良いかという、そうではなくて、全国平均ぐらいなのです。だから、少なくとも高校では、原級留め置きにすれば成績が上がるというような単純なものではないようです。

畑田 只今の栗山先生のお話は、原級留め置きにしても結局は中退せざるを得ないような生徒を留年させても、成績の向上にはつながらないということで、関口先生の言われたフランス方式の適切さを実証していただいたような気がします。原級留め置きは、それが、効果があるという自信を教員が持てる場合にだけ行うというのが大事なことなのではないでしょうか。

先ほど紹介した、うちの子供のアメリカの小学校での原級留め置きも、フランスとは少し状況は違いますが、英語の出来ない子供を進級させて、わけのわからない授業を受けさせるよりは、授業内容の易しい学年で、もう少し英語の勉強をさせた方が、効果的だという判断だったと思います。それと、この小学校はマサチューセッツ州立大学教育学部の付属小学校で、大学院学生がサブティーチャーとして1クラスに2人程度配置されていて、原級留め置き生徒に対しても十分な配慮の出来る環境でした。まさに、ゆとりのある教育環境でした。義務教育で、習熟度の低い生徒をただ原級留め置きにするだけではあまり意味が無いというのは間違いないと思います。

大友 あまり詳しくは知らないのですが、北欧では発達状態の個人差の大きい小学校低学年で足踏みをさせてやって、習熟度が十分上がってから進級させるというのが多いと聞いています。上位学年での原級留め置きはあまりないのではないのでしょうか。

畑田 原級留め置きは子供に対する一種の手助けなのですね。先ほどお話しの出ていた新人先生に対する手助けも、同僚の先生や家庭・地域の人たちの一寸した配慮が役に立つことが多いのです。今日ここにお越しいただいた方々が、学校・職場、家庭、地域にお帰りになって、周囲の人たちに、ここでの議論の結果を発信していただき、それを聞いた人々が、また同じことをしていただくということが、途切れずに繰り返されれば、羽曳野市全体が素晴らしい教育環境になるのに、そんなに時間がかからないように思います。そういう努力が我々に必要なのだと思っています。それでは、3時半まで休ませて頂きます。後半もよろしくお願ひします。

10. 生徒にとって魅力ある先生になろう—先生と生徒の親近感と敬愛の心

畑田 それでは、後半を始めさせていただきます。後半は、今の教育でこれだけは守りたい、あるいは、これまでのやり方をもっと深めていきたいというのはどれで、どうしても変えたい、あるいは、新しく導入したいのはどういうことかという議論をしていただくのですが、その前に少しだけ時間を取って、フロアの方から、少しご意見を頂こうかなと思います。どなたでもどうぞ。

男性 C 一つは、先生が生徒に好かれていないと、勉強してくれないということです。人気取りはいけません、先生が生徒に嫌われたら教育は成り立たない。2番目は、私の中学校時代は、先生が自分の教科以外に、それぞれ何か専門を持っておられた。たとえば、美術の先生が童話の本を書かれたり、漢文の先生は、よく柳田國男の民話、民謡、民芸などのいわゆるフォークロア研究のお話を授業中にされたり、歴史の先生は、神社や古美術の写真、英語の先生はフランス語の話という具合でした。そういう先生に魅力を感じて好きになりました。先生が好きだったら尋ねていってお話しをしたり、質問も出来る。それで、先生も一所懸命やっておられることが分かり、自分の勉強も進むのです。私は、文科系の人間ですが、数学の先生が好きになって、数学も勉強するようになりました。私は、当時、大阪の平野にあった女子師範付属中学に通っていたのですが、運動神経が鈍くて、鉄棒の逆上がりがなかなか出来なかった。それを、放課後に一人の先生が付きっきりでコツを教えて下さって、やっと出来るようになった。その時、手を叩いて褒めて頂いたのが凄く嬉しかったことを今もよく覚えています。

それともう一つ言って置きたいことは、昔も、いじめはあったということです。でも、いじめた同級生と、その翌日にはもうケロッとして、もう普通に付き合っているというようないじめ方

でした。教育実習に来られた教生の先生に嫌がらせをしたこともありましたが、その後すぐに教生の先生と担任の先生に謝りに行って許していただいた。しつこいいじめや、互いにいつまでも根に持つようなことは無くて、あっさりしていました。今と大分様子が違うと思います。

畑田 只今は、生徒が先生を好きで無ければ教育は成り立たないというお話で、先ほどの教員と生徒の信頼感ということのを別の言い方で表現していただいたのだと思います。それと、今の先生は生徒に好かれていないというお話かと思うのですが、そうだとしたら、それはなぜかということが大事な問題です。先生だけの責任とはとても思えません。

中学校の先生の生徒に対する魅力を高める要因として挙げられた専門以外にもう一つの専門をという話は、何年も前にパイ型人間という言葉でやかましく言われたことなのですが、今はどうなのでしょう。前半で、中学校で総合的な学習が上手く進まなかった理由として、大友先生が中学校の授業が教科制になっていることを挙げられたことから考えると、今の中学校の先生は専門の足が一本ということでしょうか。自分の専門以外に、もう一つ興味のある分野をお持ちいただけると有難いと思います。

最後のいじめの話ですが、確かに私たちの時も仲間いじめや先生いじめをよくやりました。でも、基本的には、皆が仲良くやっていかねばならないということは分かっている、そのための子供なりの生活の知恵みたいなものを持っていたように思います。大抵の先生には、ある種の親しみを込めた渾名が付けられていて、蔭では先生を渾名で呼んでいました。今はどうでしょうか。

栗山 そう言われれば、高校では、昔に比べて渾名の付いている先生は少ないですね。

畑田 私も高校の時に、松村先生が5人居られて、それぞれ、大松、小松、長松、ぼそ松と呼ばれていましたが、5人目に来られた先生が「僕はなに松だろうと期待していたが、ついに渾名がつかなかった」といっておられたのを覚えております。いずれにしても、先生も生徒もお互いに親近感を強めようと努力をしていたのではないかと、今にして思います

戸川 今の若い先生方は、我々の年代のものよりも、知識、理解力ともに高いし、多芸だと思います。勿論、コンピューター、携帯電話などが生活の中に溶け込んでいて、情報機器を使う能力は非常に高い。資料の作成などを頼むと、翌日にはよく整理されていて、見易く、分かり易いものが出来上がっています。

ただし、生徒との信頼関係をいかにして作るかという点では、私から見て、それはあまりよくないのではないかと、首をかしげたくなるようなことが結構あります。たとえば、すぐには、子供たちにご飯をご馳走するとか、直接的で即物的な方法で、子供と対応しているように思います。そこで、えこひいきという感覚がその周辺に生まれてくる、ひいきされた者はいいが、そうでないものはあまり良い気持ちはしない。そういうことは、あまり良い状態ではないという感覚が今の先生には無いように思われるのです。それが社会的に良いことかどうかを考えもせずに、自分の感覚だけで物事を処理してしまうようなところがあります。

畑田 子供が先生を好きになるのは、あくまでも個人的感情です。生徒がある先生を好きになれば、先生もその生徒を好きになる。これは至極当然の個人的感情で、心の交流であります。同時にえこひいきとも言えます。あの先生は、あの子供にひいきしている、というような話は昔も一杯ありました。ひいきされるのは、大体、意欲が高くて、出来の良い子供が多かったように思います。問題は、それを単なる個人的感情に終わらせないだけの教育的配慮がなされているか、ということだと思います。先生を好きだという子供の期待に応じてやることで、意欲と学習のレベルを一段と向上させることが出来るのであれば、子供の能力を最大限に伸ばすという教育の根本原理、すなわち教育の真実にかなう行為だと私は思います。ただ、それによって、その子供以外の子供に対する愛情が希薄になるようなことがあってはならないというのが大事な点です。同時に、先生の支援でその能力を最大限に伸ばすことが出来た子供が、その効果を何らかの方法で他の子供たちに波及させることが出来るかどうか、重要な点です。特定の先生と生徒の間の好意と友情の深まりを、出来るだけ多くの生徒の役に立つ形で進行させることが出来れば素晴らしいと思うのです。

男性 C 私は、旧制高等学校を卒業した後、中学校で 16 年、盲学校と養護学校 11 年、普通高校 10 年、工業高校 2 年、私立 1 年で、合計 41 年間の教員生活を送りました。筋ジストロフィーの養護学校では、随分辛いこともありました。もう寝たきりで、1 日 1 日弱って行く、とうとう、2 週間ほど家まで行って、教えている間に亡くなりました。この病気は、伴性遺伝なので、本人以外にもいろいろ問題が起こるのです。悪戯好きでヤンチャな子の多いクラス、授業中に姿勢を直すことすら出来ないクラス、体育の時間になかなか整列出来ないクラス、もう言うことが無くなるほど説教しなければならなかったクラス、何時も宿題を忘れてくる生徒を廊下に並んで立たせたことなど、いろいろ思い出しますが、当時の生徒が、今でも私を訪ねてくれます。同じことばかり言いますが、先生と生徒との心の結び付きが大事だと思います。

畑田 私も同じことを何回も言いますが、たとえ、先生と生徒の心の結び付きが少なくなっているとしても、それをすべて先生の所為にするだけでは何も解決しない。今でも、あの先生のお陰で今の自分があると思っている人は沢山いるように私は思います。大事なことは、問題を解決するには、どうすればよいのかを皆が一緒になって考え、実行することだと思います。言い方を変えれば、先生も含めて社会の人たちが、先生と生徒の心の結び付きが大事だと考えておれば、問題は解決する筈だということです。そうならないのは、ひょっとすると、教育の場に近いところに、先生と生徒の心の結び付きなど、どうしてもよいと考えておられる方が、かなり居られるのではないかという危惧を抱きます。先生を親や社会の非難や反対を避けるための鎧をまとった教える機械にしてしまっただけは駄目だということです。

女性 A 私の長男が小学校に入学したときのことですが、先生と生徒の会話があまりにも馴れ馴れしくて、生徒が先生に向かってほとんど敬語を使わないのに驚きました。教える立場の先生と、教えられる立場の生徒との会話がこれでは良くない、でも、目上の者に対する言葉づかいを、子供は一体どこで会得するのだろうと思ったのです。それで、懇談会のときに先生にお聞きしました。そうしたら、教頭先生が、「先生には敬語というか、丁寧な言葉を使わなければならないと言ったり、あるいは、先生は、自分たちを教えてください人だから、一段上の人だということを感じさせたりしたら、生徒の半分ぐらいは、教室の隅に行ってしまうと、先生とものが言えなくなってしまう」と言われたのです。そのとき私は、「そうですか」と言って引き下がれなくて、「たとえ親子でも、父や母にもものを言うときは、たまにぞんざいな言葉を使うことはあっても、普通は敬語を使うでしょう。だから、学校で生徒が先生に何かを尋ねるときも、それが朝であれば、先ず『お早うございます』と挨拶をしてから、『僕、これ分かりませんので、先生済みませんが、教えていただけませんか』というふうに、敬語を使ってものを言うように、指導していただけてませんか」と申し上げたのです。先生が、子供に対して、媚びているとも思えるほど、へりくだり過ぎて、上からもの言う子供は自分に懐かないのではないかという不安感をお持ちなのかなあ、それで、先生が生徒にお世辞を言っておられるのかなあ、と思うくらいです。先生の方から生徒に親しく近寄ろうという配慮は有難いのですが、先生は、やはり、先生らしい言葉と態度で、生徒に接していただいて、先生と生徒はどういう関係なのかを生徒に学ばせて頂きたいと思うし、そういうことを生徒が未だ理解していない小学校入学直後に、先生が生徒と友達のような付き合い方をされるのは、如何なものかなあ、とずっと思ってきました。今日ご出席の先生方はどのようにお考えでしょうか。

畑田 私も、よくそう思います。先生方、どなたか代表してお答えいただけますでしょうか。

安部 本当に、仰る通りだと思います。先生と生徒がいわゆる友達感覚で付き合う、昔あった教壇を取り払って、先生と子供はフラットで同じ高さに居ますよ、先生は君たちと一緒にだよ、一緒に感覚で授業をしましょう、先生は子供たちともっと近い関係になりましょう、ということが言い出されたのは、中学校が非常に荒れた時代の頃だったと思います。丁度その頃、TBS の「3 年 B 組金八先生」という教育・学園ドラマ番組が始まって（1979 年）、武田鉄矢の金八先生が子供を下の名前でポンと呼ぶ、生徒も「金八っ！」というような形で先生を呼ぶ、そんな番組が全国的に凄い人気番組になったのです。今、考えてみますと、あのあたりから今の様な先生と生

徒の関係が始まったのだと思います。でも、先生をはじめ目上の人たちに、ゆるみや崩れの無い正確な言葉でお話しをするというのは、非常に大事なことです。そのことをきっちり学習させる必要があります。お母さん方も少し前までは、子供が先生に乱暴な言葉を使った時には、ハッとするような形で、「先生ごめんなさいね、あんな言葉を子供が使った」というふうに言っておりましたが、この頃は、お母さんの方が、そんな言葉使いになってこられました。「なあ、先生、ねえ」と言いながら、職員室の戸をガラッと開けて入ってこられる。一寸考えてみたら、丁度、今の小学生の保護者が、多分、中学校時代に金八先生のテレビ番組を見ておられたのではないのでしょうか。畑田先生に「そういう保護者を育てたのは、先生たちでしょう」と怒られても仕方が無いことで、今後、軌道修正をして、正しい言葉の使い方を教え、学ばせなければならぬと思っております。

畑田 正しい言葉の使い方を学ばせるのは、先生方のご努力で、何とかなると思うのですが、これに関連して、先生と子供が友達のような関係を持つということについてはどう思われますか。

男性 C 私が教員であった頃の先生と生徒の関係、親しさは、単なる友達関係というのではなく、お互いに相手を思いやる気持ちが強かったと思います。そこで、言葉づかいそのものは、あまり問題ではないように思うのです。たとえば、出来の悪い男の子が、「先生、これ、昨日、俺、この問題 30 分かかってんだけど、出来へんかった、教えてくれへんか」と私のところへ訪ねて来たことがあります。この時私は、その子が、言葉が丁寧でないとか、敬語を使っていないとかよりも、わざわざ、出来ないことを聞きに来てくれたことが、大変嬉しかったのです。また、違う学校でのことですが、校長室の前を通っていると、生徒が、「先生、今、〇〇先生が校長先生に怒られてるので、助けてあげて」と言うのです。そんなことは無いと思ったのですが、あまり言うので、戸を開けて、中の様子を見たら、やはりそうではなかった。私が言いたいのは、先生と生徒の間には、言葉づかいとか、敬語を超えて、それ以上に、親しい結びつきがなければならないと思うのです。先生は生徒のことを思い、生徒も先生のことを思うというような関係です。授業開始のベルが鳴ったら、すぐに教室に入ろうと思って廊下で待っていると、生徒が来て、「先生、ここで、何してるの。職員室で除け者になっているのと違う？」と言うのです。帰り際に、生徒と一緒に、いろいろ話しながら帰ることもあります。言葉づかいなどよりも、心の結びつきが大事だと私は思います。先ほども言いましたが、先生が自分の教科以外に何かを一所懸命にやっているというようなことも、生徒はよく見えています。私、一時、フランスに行きたいと思って、フランス語を勉強していたことがあるのです。そうしたら、卒業の時の別れの色紙に、「私はあなたに感謝します」とフランス語で書いてくれているのです。嬉しかったです。

畑田 敬語や言葉遣いも大事だけれども、それよりも心の結びつきが大事だというお話でした。心のこもっていない単なる形だけの言葉はともかくとして、言葉は心の現れですから、私はどちらも大事だと思います。ただ、敬語に関しては、学校で明らかに目上の先生に対して、友達と同じ言葉づかいで話をするというのでは、世の中に出てから困ります。敬語を使う習慣は、学校にいる間に身につけておく必要があると思います。あとは、先生と生徒の間に、お互いに、どれだけの信頼感、信頼関係があるかという話になってくると思うのですが、いかがでしょうか。

11. 学校は社会の縮図—教師、親、子供と一緒に話合い、考えよう

池田 私は、専門が、文化人類学で、文化と社会、あるいは、国家と国民、そういう関係についての比較研究が専門の一つなので、その観点から意見を言わせて頂きます。まず、学校にいる子供が子供の全てではないということです。大人も同じことで、ある職場で仕事をしているけれども、それ以外の部分でも、社会的な、あるいは、個人的な生活を送っている訳ですね。したがって、学校の中で観察される子供というのは、言い方は穏当ではないですが、学校の中に閉じ込められている子供なのです。したがって、学校の先生方は、非常に長い時間、子供に一番近いところにおいて、子供たちのことを観察されている、ある意味で、子供たちの優良な観察者ですが、子供についてご存じないことも一杯あるのです。家庭の中で保護者とどのように付き合っているの

か、子供たち同士ではどうか、そういうことは、なかなか発見できないのです。だから、いじめの認識についても、事件が起こったときには、行き違いがあるということになります。それから、子供というのは、皆さんご自身が、子供の時のことを考えて頂ければ、すぐに分かると思うのですが、子供なりに、理性的、合理的な判断をしているのです。ところが、大人になると、子供の時の現場的な感覚が無くなって、今、起こっていることを合理化し、正当化して、心理学ではありませんが、悪いこと、悪いことの経験のようなものは、適当に消去したり、あるいは、都合のいいように解釈したりするようになるのです。これが大人なのです。ということは、子供は、教師を含めて大人が考える以上に広い範囲の、知性、能力、潜在的な様々な能力を持っているのです。換言すれば、子供たちは、学校教育で教師が教える以上のことを学んでいるのです。このことを考慮しないと、判断を誤ることがあります。人間が持っている知識能力の潜在的可能性に対して、学校教育がどれだけ貢献しているかについて考えてみると、ノーベル賞受賞者のスピーチなどによく出てくるように、学校というのは、知識供給の場というよりは、むしろ触媒なのです。それは、先ほど、元教師の方がお話された内容そのものだと私は思います。学校は、ある意味で、社会の縮図のようなところがあります。先ほど、社会から切り離されて、閉じ込められていると言いましたが、それ自体が社会なのです。学校は、校門や壁によって隔てられているけれども、教師、生徒、それから親がその場を作っていて、お互いに、相互浸透している訳です。だから、テレビで見た金八先生や俳優・政治家の森田健作みたいな人が、「これが本当の理想的な付き合い方なのだ」と現れるのです。つまり、好むと好まざるに関わらず、学校は、日本社会の縮図と考えざるを得ないのです。だからこそ、学校教育を変える時に、日本社会をどう変えるのかが、テーマになる訳で、カリキュラムの内容みたいなものだけを変えても意味がないのです。学校教育、あるいは学校の改善が、社会の人間関係を変えることに繋がらなければ意味が無い。先ほどの、敬語をどう考えるのか、先生と生徒の間の尊敬語をどう考えるかという話も、社会全般で敬語法がどう変わってきているのか、あるいは、どうあるべきなのかということを考えて、教師、親、それと当事者である子供たちを含めて議論しないと、何も変わらないと私は思います。そうでないと、自分が存在する社会に何か問題が起こった時に、その内容について自主的に考え、解決策を模索していくという自律的な存在には、何時まで経ってもならないと思うのです。

畑田 いくつかの大事なご指摘を頂きました。学校は社会の縮図である、だから、社会が変わらなければ学校は変わらない。では、その社会は誰が変えるのか、ここが大事なポイントだと思うのです。今日のフォーラムでこの議論をする時間はありませんが、少なくとも、教師とその教えを受けて社会に出ていく子供たちは、社会をより良いものにしていくという重要な使命を担っているのだと私は思っています。この点に関して、私も最初に申し上げたところですが、只今の池田先生の教師と親だけでなく、当事者である子供も含めて議論しないと何も変わらない、というのは極めて重要なご指摘です。子供たちが議論に参加することで、自分たちは将来の社会をより良いものにするために学んでいるのだという使命感を持ち、それを高めてくれれば、池田先生の「学校は知識供給の場というよりは、むしろ触媒である」、すなわち、学校は教員が生徒に知識を授ける場というよりは、むしろ生徒に知識学習の意欲を高め、その獲得を可能にするために作られた、子供たちにとって無くてはならない場であるという提言が生きてくるのだと思います。子供の立場から言えば、学校は知識獲得の触媒機能を持った学習の場である、ということです。

男性 C 今の池田先生のお話しに関連して、生徒が社会勉強を始めるのも学校だと思うのですが、たとえば、しつけは、最近、学校ではどの様に教えておられるのでしょうか。敬語もしつけの一つだと思うのですが。

畑田 学校教育の中で、しつけの授業は、義務教育の小学校、中学校で週一回行われる道徳の時間に含まれていると思います。高等学校と大学には無いようですね。

栗山 高等学校に道徳の時間はありません。ただ、今の大阪の全ての高校に共通している傾向は、教育を生徒が社会に出てからその成果がどう現れるかという観点から考えようということです。きっちり挨拶が出来て、敬語を使えるような人間、時間を守れる人間、そういう人間を育ててい

こうという教育理念が高校にあることは間違いないと思います。勉強が出来る、出来ないよりは、学校を出てから、社会の役に立てる人間を育てようという方向に、変わりつつあるのです。たとえば、勉強させるのが凄くしんどい学校では、生徒会の委員の子らが、正門のところに並んで、毎日、おはよう運動をやるなどです。だから、高校でもしつけは教えているということになります。

畑田 ただ、しつけの教育などは、家庭や地域社会でやって欲しいと思っている人も多いでしょうが。

栗山 少なくとも高校の先生方は、そういうことを、あまり、期待していないと思います。

久堀 皆さんに多くの問題提起をいただいて、特に池田先生からは、学校教育に対して温かいお言葉をいただいて、感激しております。教育の問題は、先ほどもお話しがありましたように、問題の責任はどこにあるのかというような議論ではなくて、学校、家庭、社会での教育、すなわち教育全体の中での学校教育という観点から、子供を中心に、どうあるべきかを考えないといけないと思うのです。だから、躰は、学校教育、学校の現場でもきっちり教えねばならないし、家庭でも、それに沿ってやって頂かねばならないということなのです。私たち中学校の教員は、子供たちを学校で3年間育て、また、卒業生とも会っていろいろな話を聞くというような機会を沢山持っています。そういう経験を通して子供たちを見てみると、人生の成功の秘訣は何かということ、いろいろと考えさせられるのです。先ず、成功とは何かということですが、一般的には、自己実現、すなわち自分というある目的を持った存在を人生の中でしっかりと実現していることと考えられますが、社会的には、指導的な立場、あるいは経営的な立場に立って、それなりに活躍していることが、成功だと私は思います。この成功の定義にしたがって卒業生を見ると、社会での成功の度合いは、必ずしも、偏差値や中学時代の成績とは相関しないのです。学校時代の評価は高くなくても、卒業してからは、元気に頑張っている子が沢山いるのです。京セラの稲盛和夫さんの本を読んでいたならば、人生の方程式というのが書いてあり、考え方掛ける、能力掛ける、熱意だということです。考え方には、善と悪、プラスとマイナスがあります。考え方がマイナスの方向を向いていけば、どんなに能力を持っていても、悪い方にしか向かないでしょう。今の日本の教育は、能力の養成にかなりの重心を置いて、子供たちを切磋琢磨させていると私は思います。ただ、私は子供たちの卒業後の人生を見ていて、この稲盛方程式の最後の熱意が、人生に凄く大きな影響を与えるのではないかと思うのです。一所懸命頑張る気持ちとか、一所懸命になれる気持ちとか、そういうものを持っている子どもが、やはり成功しています。それでは、この熱意はどこで育てられるのかというと、それは家庭と学校だと思うのです。この人間のコア、核になるような部分が育つ時期に愛情をもらっているか、愛着を得ているか、あるいは、絶対的な信頼感を得ているか、ということがもの凄く大事だと思うのです。全ての親がこういうものを子供に享受させるべきだと私は思うのです。それを学校が支えられれば、もっと良い訳です。そういう親はどうすれば育つのか、学校でも努力をしなければならないのは当然です。私は、これを制度化してはどうかと思うのです。たとえば、子供の6ヶ月検診、12ヶ月歳検診のときに研修を義務化するという方法です。いわゆる、子供の成長とはどういうことか、子供とはどういう存在なのか、子供はどう成長していくのか、その過程でどのような課題が、どの時期に出てくるのか、それを克服するためには、どんな手立てが必要で、子供に対するどんな語りかけが必要なのか、というようなことを、親に先ずしっかりと学んでもらう研修です。子供を育てながら、親になっていくことが、必要なのです。この必要性は、昔の大家族の中では、ごく自然に満たされていたのですが、それが成り立たなくなった今、熱意を持って一所懸命がんばられる子どもを育てられる親業の教育を、社会教育分野での制度として確立することが必要不可欠であると強く思う次第です。さらに言えば、幼稚園や保育所の年代まで、義務教育の始まりを低年齢化して、幼稚園、保育所と小学校の低学年とを一緒にしたような部分で、学ぶことの面白さ、周囲の人と関わることの面白さ、子供同士で遊び合うことの面白さを、しっかり身に付けさせて、生涯ももっともっと学び続ける日本人を作るために、面白くて乗り越える楽しさや快感を味わわせてやりたいものだ

と、私は本気で思っているのです。そのような教育の核になるのは、その大事な時期に子供の傍にいて、適切な支援の出来る、手を差し伸べられる親だと思ふのです。これは、学校教育関係者として、逃げ口上で言っているのではなくて、本気で、非常に強く、そう思ふのです。そういう社会の出現を強く、強く望んでいます。

畑田 如何にして、熱意を持って、一所懸命がんばれる子どもを育てることのできる親を育てるかについて、具体的で素晴らしいご提案を頂きました。教育基本法にも「幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであることにかんがみ、国及び地方公共団体は、幼児の健やかな成長に資する良好な環境の整備その他適当な方法によって、その振興に努めなければならない（第十一条）」と、幼児教育の重要性が述べられております。久堀先生のこのご提案は是非とも実現させたいと思ふます。その先頭に立つというか、そういう方向に社会を導いていくためには、先生方のお力を借りるしかないと思ふます。子育ては親の重要な仕事ですが、この提案実現のための活動は、親の支援を得ながら、先生が先頭に立って行動していただくことがどうしても必要だと思ふのです。親はそれを支援するという立場ではないのでしょうか。

それから、親の子育ての力に関しては、核家族化による祖父母の子供（孫）の親に対する教育力の低下の問題を解消、あるいは改善する可能性は無いのかということと、一人親の子供が増えたことによる問題をどうするのかということも、考慮する必要があると思ふます

12. 根本原理の教育を考える

畑田拓男 この丹比地区では、朝の登校時に、通学路に子供たちを見守る地域の学校支援ボランティアが立っております。子供と学校まで一緒に行く保護者も時々あります。その時に、ボランティアに保護者が挨拶される場合は、子供もちゃんと挨拶をします。知らん顔をして通り過ぎる親の場合は、子供も同じです。子供は、親をよく見ております。親の教育力の低下というよりも、親の子供に対する影響は非常に大きいということです。ここで考えて欲しいことは、躰に限らず、いろいろなことの指導は、型から入るのか、内容から入るのか、すなわち、躰で言えば、こういう時には、こういうふうにしなさいと言って、型を上から生徒に浸透させていくのか、それとも、こういう時は、こういうふうにするのが良いのではないですか、考えてみなさい、あるいは、こういう理由でこうした方が良いのですと言って、作法の内容を理解させるのか、ということです。作法の型を押しつけるのか、あるいは作法の内容を良く理解させたいうえて、作法を学ばせるのかということです。私が現役のときに、制服問題が起こって、そのときに、お決まりの制服を着なさいというのと、服装は生徒の自由だから学校へ来るときの服装は自分で考えなさいというのと、どちらが良いかということで、大論争をやったことがあるのです。最後の結論は、やっぱり型から教え込む方法、すなわち制服を着用させるということに落ち着いたのです。子供に対しては、型から入って、こうしなさいと言うのがいいのか、あるいは、内容を良く考えさせて、何故そうしなければならぬのかを良く指導して理解させるのが良いのかは、難しい問題です。後者の方法は、非常に時間が掛かるのと、教員側が思っているようには進まないこともあります。でも、こちらの方が適切と言うこともあると思ふます。これが、教育の難しさだと思ふます。

畑田 今のご指摘は日本の教育の非常に重要な部分に関わっております。それは、これまでの、日本の教育は、どちらかという、型から入る方法を主流とし、その内容の根本原理を理解させるという指導方法を採用してこなかった傾向があります。根本原理を教えるのを忘れていたと言いたくなることもあります。一例を挙げます。理科で密度のことを教えるのは中学校ですが、先ず密度とは物質の質量を体積で除したものであるという定義を教えて、その後で、1グラムの物体の密度が2であれば体積はいくらか、というような計算をさせます。でも、密度のことを教える前に、物質を構成しているのは分子という目に見えない非常に小さな粒子なのだという分子の概念を教えてないので、「十円銅貨を水に入れると沈むが、十円銅貨よりは、はるかに重い家の大黒柱を水に入れると浮くのは何故か」と聞かれると、生徒は、「それは十円銅貨の密度は1より大きく、大黒柱の密度は1より小さいからだ」とは答えられても、そのような密度の違いは何が

原因なのかは、いくら考えても答えられないのです。ところが、ある中学校で、分子の概念を教えたうえで、「密度の大小は何によって決まっていると思う？」と聞いてみたら、一人の子が、「分子の質量」と答えたので、「それだけか？」と、もう一度聞いてみたら、別の一人が「分子の集まり方だ。分子がぎゅうぎゅうに詰まっていれば密度が大きくなる」と言ってくれたのです。非常に嬉しかった、それと同時に、根本原理の教育を、多少時間はかかっても、もっと進める努力をすべきだと強く感じました。

もう一つ卑近な例をあげます。「敷居を踏んではいけない、それは神様の頭を踏むのと同じだ」というのは、型による教え方です。私も、小さい頃「敷居を踏むな」と、よく言われました。でも、これは敷居を踏むと柱と敷居の接合部に大きな力がかかり、家が歪むからなのです。私の様に体重 48 キロの人間でも、敷居の中央に立って、一寸力を出すだけで、外れ難い戸が外せます。この時、接合部にはかなり強い力がかかっております。だから不必要に敷居を踏むのはいけないのです。子供にはこれは一寸教えにくいので、先ず型で教えている訳です。一般に、根本原理を教えようとする、時間が掛かります。私が小学生の頃は、先生が夜の宿直もしておられたので、夜、宿直室に遊びに行き、先生に難しいことをゆっくりと教えていただくような機会がありました。それから、先生の家庭訪問の時に、親も一緒にお話しすることもありました。先生と生徒の間の信頼感は、教室だけでなく、こういう機会を通して、少しずつ作られていったように思います。

ところで、非常に多くのご意見いただいたのですが、ぼつぼつ後半の主題である、「今の教育で、変えねばならないこと、変えてはいけないこと」に入りたいのですが。

13. PTA、PTSA を活性化できないか？

女性 B すみません、畑田先生。

畑田 はい。

女性 B 先ほどの親の熱意のことに関して、少しお話しさせて下さい。私の教え子に、埴生南小学校から河原城中学校、美原高校、大阪体育大学を卒業した上原善広君という子がいます。彼が小学校 4 年生の時に担任しました。実は今日、ここに来てくれる筈だったのですが、体調が悪くて来ることが出来ませんでした。本が好きだったお母さんの影響で、この子もよく本を読んでいます。在学中に始めた円盤投で頭角を現して府大会で優勝し、スポーツ推薦で大阪体育大学に入学、卒業後、体育教師を経てフリーライターになり、4 冊目の「日本の路地を旅する」で、大宅壮一さんのノンフィクション賞をもらいました。ちょっと変わったところもある子で、忘れ物が多かったりしたのですが、頑張り屋で、私が放課後に教室で仕事をしている横にやってきて、苦手の算数の勉強を一所懸命やったりしていました。ある時、「言うたら怒らへんか」と言うので、「そんなこと言うても、聞かんと分からんやないか。とにかく言うてみ！」と言ったら、「実は、今日僕、ランドセルを忘れてきた。運動会が延びて、給食が無くて、お弁当だったので、それが嬉しくて体操服と弁当だけを持ってきてしもうた。だから、今日は、1 日中、よその組に教科書借りに走りまわっていたんや」というのです。私は、たくましい子やなあと感心しました。

畑田 羽曳野市出身で、2010 年、「日本の路地を旅する」で第 41 回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞し、2011 年度の大阪市の咲くやこの花賞を文芸その他部門で受賞されたノンフィクション作家、上原善広氏のお話しですが、お母さんの影響を受ける能力を十分にお持ちで、それを活かす努力を一所懸命にされたという気がします。それと、かなり低学年の時から、自分の学習の成果が、社会に影響を与えることが出来るのだということに、気付いて居られたのではないかなという気がします。

私に、小学生の時に、戦争に行っていた父に代わって読書の楽しみを教えてくれたのは、視力が低くて兵隊になれなかった父の弟です。私の父は、もの凄く不器用で、なにか機械をいじくると必ず潰れるのです。それで、私が自分でラジオを作ったり、顕微鏡を作ったり、望遠鏡を作っ

たり、いろんなことを自分でできるようになりました。物の無い時代ですから、電気テスターなども、全部、自分で作りました。大学生時代は、ラジオ作りがよいアルバイトになりました。父は、反面教師的な役割を担ってくれたのです。子供が育っていく上で、家族の繋がり、家族の絆が非常に大事なのだと思います。

ところで、戦後、アメリカが日本にくれたものの中に、PTA (Parent-Teacher Association) があります。最近では、PTSA (Parent-Teacher-Student Association) あるいは PTCA (Parent-Teacher-Community Association) とも言われますが、その使命・目標は、子供と親のつながりを、学校社会、地域社会に展開して、学校教育の支援をすることだと思っておりますが、この組織を、もっと活用しては如何でしょうか。

吉澤 私はPTAの会長をやっていたこともあるのですが、活動をしようとしても、皆さん、なかなか応じてくれないのです。教育支援でなくて、研修会でも、参加者は研修内容の大部分をすでにご存じの方が殆どで、本当に来て欲しい人は、来ていただけないのが実情です。市全体で、小学校14校、中学校6校がありますが、そのPTA会長や役員の方々にお集まりいただいて行う研修会も、年々参加者が減ってきて、今は、各小学校区にある青少年健全育成連絡協議会の市全体の連絡会議と一緒に開くような状態です。親の意識が次第に低くなってきて、PTAの会長も引き受け手が無くなり、同じ人が何年もやることとなり、PTAは大分弱体化していると言わざるを得ないように思います。でも、これは絶対必要なものなので、変えてはいけないものの一つです。どのようにして維持していくかが、かなりの難問であることは事実です。

畑田 親はしばらく置いておいて、先生と生徒だけでやるというのはいかがですか。

吉澤 それも、一つの選択肢なのですが、実は、先生も教頭先生、校長先生を除いて、なかなか集まっただけではないのです。先生もPTAに対する意識はあまり高くないように思います。

畑田 第3節でも引用した教育基本法第十三条「学校、家庭及び地域住民その他の関係者は、教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚するとともに、相互の連携及び協力に努めるものとする」は、まさに、PTCAが機能することの重要性を述べているのです。ただ、地域社会と親のPTAに対する意識の向上というのも、つまるところ、教育に帰してしまうのです。このPTAをどうするかというのも大変大事な問題なのですが、時間が切迫して参りましたので、この問題の議論は、誠に申し訳ないですが、別の機会に譲らせて頂きたいと思っております。

14. 教育現場にゆとりを取り戻そう

ここから今日のまとめに入りたいと思っております。今日の主題は、「これからの教育一変えねばならないこと、変えてはならないこと」です。これは「残して、さらに深めていくべき教育手法と新しく始めなければならない教育手法」と言い換えた方が分かり易いかもしれませんが、いずれにしても、これらについての議論は、前半の討論でほとんど出尽くしているように思われます。それで残りの時間は、ここまでの討論で議論された題目のうち、もう少し議論しておいた方が良くと思われることについてご発言願えればと思っております。

教員と学生との信頼関係の欠落が問題になっておりましたが、これについてももう少しご意見を伺いたしたいと思います。

男性 C 昔は、こんなことに特に気を使わなくても、上手くいっていたし、たとえ何か問題が起こっても、先生同士がお互いに助け合って、解決していたのですが。

畑田 私も同感ですが、最近はそのようなふうには事が運ばないのです。

畑田拓男 それは教師が忙しすぎて、ゆとりがなくなっている所為だと思います。

久堀 私も教員が忙しすぎるのが最大の原因だと思います。

畑田 私もそれを痛切に感じます。こんなゆとりのない先生ばかりでは、ゆとりの教育など、出来る筈もないとさえ思います。どうしてもやらねばならない仕事で忙しいのなら、もう少し定員を増やすべきですが、一度、教員の仕事の内容とその処理の仕方を見直してみてもいかがでしょうか。大阪大学の最近の教員の仕事を見ても、出勤簿のコンピューター管理は良いとしても、

東京出張の時に、都内の JR の切符や阪急電車の切符から未だ使いきっていない「スロット関西」カードまで出張報告に添付させるなどは、如何なものかという気がします。

池田 あまり大きな意味はないが、やるのは非常に面倒くさいという事務的な仕事が多くなったのは事実です。やるのが当たり前と言えば当たり前のことばかりではありますが、もう少し教員を信用してくれてもいいような気がします。ただ、信用し難いようなことをされる教授が居られるのも事実で、そのために文科省が厳しい目を光らせるようになったのだと思います。

畑田 ただ、ごく僅かの信用できない教員のために、他の教員の全てがやる必要もないようなことを一杯やらされて、教育・研究にかけられる時間を削られるというのは問題だと思います。

大友 公立学校の教師の多忙さは、公立から私学に行って、一層はつきり分かりました。私学では、事務局機能が非常に充実しています。公立学校の先生方の事務的仕事の量は、かなり多いです。教育に直接かかわる部分は致し方ないのですが、それ以外の、給食費をはじめ諸費の集金や文書の配布などは、私学では事務局が殆ど引き受けています。それで、放課後の時間の殆どは、会議さえなければ、生徒との交流に使えます。公立学校も事務職機能を増強して、教員に時間的ゆとりを持たせ、現場の状況を変えるべきだと思います。予算措置をきっちりすれば、公立学校でも出来る筈です。もう一つは、教員による部活動支援です。これも、指導者をもっと増やして時間のゆとりを作れば、教員の意欲が上がり、専門性も、もっと発揮できると思うのです。

畑田 国公立学校の事務職機能を増強して、教育現場にゆとりをもたらそうというご意見です。それから、部活動の指導者を外部から導入することにも予算措置は必要ですが、出前授業の様にして外部の専門家をお願いするのも一つの方法かと思います。それから、先ほどの旅費に関わる手続きなど、教員の事務的仕事を出来るだけ簡潔にして、教育・研究以外の負担を出来るだけ減らそうという問題も、よく考える必要があると思います。

池田 先ほどの、ごく僅かの教授の倫理観の欠如のために、出張旅費の新制手続きがすこぶる煩雑になったという話ですが、一部の人々が反社会的なことをやると、全体がそうなのだというレッテルを貼られてしまうことがある。それを予防するために、全体が厳しい監視下に置かれて、性善説の論理が働かなくなり、信頼感も喪失したということだと思います。

畑田 外国出張に関してもう一つ、先日、どこかの大学の先生が外国での学会に出席した時に、学会とは無関係の博物館や美術館を訪れたということが問題になっていました。でも、そこが非常に貴重な場所で、その機会を逃すと 2 度と訪れることが出来ないと考えられるような場合には、この先生の行動を倫理の欠如と非難することは、必ずしも正しくないと思うのですが。

池田 それは、その本人が自分の行動を正当化して、糾弾に対する明確な弁明が出来るかどうかだと思います。経理的な倫理観の欠如した行動の場合もそうですが、当人が、きっちりした弁明を果たしたことがないし、大学当局が当人を処分するときに、いわゆる人権保護という名目で匿名化して、ことの透明性を低くしてしまうことがあるのです。糾弾された人達が自己弁明をすることもないので、真相究明がされないで終わってしまいます。だから、公共の議論にならないのです。

畑田 特に、こういうことを公共の議論に供するには、議論をする人達が、また、その結果を聞く人達が、議論が、物事の根本原理に従って、公正に行われ、その結果が出来るだけ多くの人達の間での好意と友情を深め、全ての人たちの役に立つかどうかを、きっちり判断できる能力を持っていることが必要です。

池田 それは、社会のどんなことでもそうだと思います。内部告発などもそうなのですが、社会が非常にオープンシステムになったことと、今日の冒頭でも話が出ましたが、情報化したということです。情報化には、人間にとって非常に幸福な部分と、危険というか、恐ろしい部分があります。海上保安庁の映像流出もそうですが、何かよく分からない、どういう効果が出てくるのか分からないような、恐ろしい部分があるのです。だから、そういう社会の状態で、信頼性を担保するシステムみたいなものが非常に不安定になった時には、それはもう、皆で真剣に対話をして、こんな問題があるのだ、あんな問題があるのだ、と本当にざっくばらんに、率直に、議論して、

問題に対する改善案も含めて、広く平等な形で意見表明の出来る場、社会的な場を沢山作っていかないと、問題は解決しない。多分、今日のこのフォーラムは、そういう場だと思います。政治家や政治の仕組みが変われば、自動的に変わるというようなものではないのです。

畑田 こういう場が機能しないと、法律一辺倒になってしまって、先ほどの博物館、美術館訪問のようなことは、どのような理由があっても駄目、という無難な対応をすることになってしまうと思います。このあたりは、生活の知恵と言うことになるのではないかと思います。

関口 日本の事務の仕事は、すごく完璧主義を採っています。これは、きっちり仕事をするのは少し違うと思うのです。たとえば、先ほどの大学の先生の出張の話でも、外地で見ていると、よく分かるのですが、学会の始まる日の前日か、前々日に日本を出て、会の終わった翌々日には、もう帰国していないといけない、というようなことを決めてあるわけです。それに有給休暇を繋ぐこともできないし、奥さんを自費で連れて行くこともできない、そういった余分なことを全部禁止することによって、完璧主義を実現しているのです。こういうやり方に問題があるのだと思います。もっとゆるいやり方で、しかし、抑えるところは、きっちり抑えることが大事なのに、役人も忙しいのですが、何かずぼらでいちばん取締り易い方法を採用しているように見えます。これは、何も出張の話だけではなくて、あらゆる学校行政、あるいは、日本の政治の、いろいろな局面に現れているように思います。

畑田 私もつくづくそう思います。政治だけでなく、日本国民がそうなのではないでしょうか。

関口 日本社会の一種の病気ですね。

畑田 この病気は何かしなければならぬ。日本の社会には、公正な寛容度というのがないのです。この寛容度がないから、先生方が追い詰められるのです。こういう寛容度は昔の方があったような気がします。

関口 私もそう思います。自分はこれだけ損をしているのだから、他の者も損しろ、という発想です。そうでなくて、自分がこれだけ得をしているのだから、他の人も得をしてくれよ、という発想がもう少し入るべきだと思うのです。戦後の財政的に苦しい時に、いろいろな問題が出てきた結果なのかもしれません。

畑田 でも、今よりは、もっと苦しい時代の方が公正な寛容度があったように思います。

関口 確かにそうですね。

畑田 きっちり仕事をするには寛容度が無ければならぬというのは、一見矛盾したことを言っているように聞こえるかもしれませんが、そうではありません。先ほども言いましたように、社会における言行は、真実、すなわち根本原理に従って公正に行われなければならないのです。これが、きっちり仕事をすることです。ところが、真実や公正さは、その社会や人によって、また時代によっても若干違うのです。決してただ一つ、あるいは全ての社会で同一ではありません。だから、寛容度なしには、きっちりしたことは行なえないのです。

ところで、これまでの日本の教育は、物事の根本原理を生徒に一所懸命考えさせる教育を怠ってきたように思います。先ほど、詳しくお話ししましたが、中学校の理科で、分子の概念を教える前に密度を学ばせるので、生徒は、何故、物質の密度に大小があるのかという密度の本質に迫る学習が出来ないのです。中学生でも、分子の概念を教えたうえで、「密度の大小は何によって決まっていると思う？」と聞けば、分子の質量と分子の集まり方という考えを引き出すことが出来ます。根本原理の教育を、多少時間はかかっても、もっと進める努力をすべきだと強く思います。化学反応でも、朝顔の花を絞った汁にリトマス試験紙を浸すと色が変わるというのは確かに面白いです。でも、それだけでは、化学が暗記ものになってしまいます。それよりも、化学反応というのは分子と分子が衝突して、分子内の構成原子同士のつながりが切れて、別のつながりが出来て、新しい分子が誕生する変化 ($A \cdot B + C \cdot D \rightarrow A \cdot D + C \cdot B$) なのだ、と教えた方が子供たちの考えは大きく広がります。根本原理のような難しいことは、小学校や中学校では教えられないなどと言わないで、先生方に努力して頂きたいのです。この分野の根本原理は自分には難し過ぎると思われた時には、外部の専門家の出前授業を活用して下さい。本当の専門家は、専門家で

ない人にも分かるように話す能力を持っている筈です。それから、カリキュラムを根本原理の教育が行いやすいように、若干修正する必要があると思います。

15、マスコミと教育

畑田 まだ、議論しなければならないことが、いくつも残っていると思います。何方でもどうぞ。

畑田拓男 日本のマスコミの対応の仕方には大きな問題があります。教育がマスコミに巻き込まれてしまっているような気がします。だから、教員の保護者との対応にしても、また、マスコミに叩かれても厄介なので、というわけで、教員が本当に言わねばならないことを言わない、ということもあるのです。それと、これは、我々の時代からの遺産かもしれませんが、教師があまりにも保護者の側に立ち過ぎて、教師の立場をきっちりと説明・主張しないというのも問題です。保護者は家の中での自分の子供しか見ていません、教室の中での自分の子供は意外に知らない。だから、先生に自分の子供が教室で注意されると、事の次第はよく知らないままで先生に苦情を言いに来る。先生の方も、事情をよく説明して、自分は教育的に正しいことをしたのだということを保護者に納得して貰えばよいのですが、万一の場合のマスコミ対応の煩わしさを考えて、心ならずも保護者に迎合してしまう、というのが問題なのです。これを何とかしたいのですが、なかなか解決できないのです。

畑田 これは、本当に何とかしなければならないですね。残念ながら、今日はマスコミの方が居られないので議論し難いのですが、マスコミは、よい意味でも、悪い意味でも、物凄い影響力を持っています。このマスコミの力を社会の発展のために、活かす能力を我々は未だ身に付けていないという気がします。これは、全国民に課せられた努力目標ではないでしょうか。たとえば、新聞のどこにも、この新聞に書いてあることを全て信用すべし、などとは書いてないのです。新聞記事をどう判断するかは、読者の責任なのです。だから、教育で、しっかりした判断力を持つ国民を育てれば、マスコミもしっかりしてくる、おかしな記事を新聞に載せたら、国民がその新聞買わなくなれば、マスコミも良い方向に変わると思うのです。これも国民皆学にかかわる問題です。

池田 マスコミと政府は、殆ど一蓮托生、善きにつけ、悪しきにつけ、行動・運命を共にするものなのです。だから、今の畑田先生が考える戦術が功を奏することは殆どあり得ないと私は思います。というのは、大学教育や大学研究で、文部科学省から様々な競争的資金の支援を受けた場合の、成果の評価では、その実施期間の間に、どれだけマスメディアに登場したかというふうなことを示す新聞記事があれば、評価が非常に高くなります。財政支援を受けた人たちの満足度や文部科学省の担当官のそのプロジェクトの成果に対する評価などは殆ど問題にされないことが多いのです。多分、財務省に予算を要求する時に、その典拠資料として、過去に資金援助を受けた人達の成果・業績に対する評価を、マスコミ以外の形で自信を持って作成して、財務省と折衝することが出来ないのではないかと推量するのです。それで、結局、安易なマスコミの評判みたいなものを利用するという構造になっているのではないかと思います。明日から新聞をとらないようにしよう、とか、あるいは、1日のうち30分テレビを消そう、みたいな運動の方が私は良いと思います。

畑田 勿論、そういう運動も効果はあると思いますが、教育の根本原理にかかわる国民の判断力の向上という教育的努力目標は続けねばならないと思います。ところで、先ほどから、道徳に関わるお話がいくつか出ておりますが、小学校、中学校では、道徳の時間は、週1回、年間35回あるのです。ところが、この間、ある高等学校で「道徳と科学」という話をして、その後で、道徳とは一体どういうことだと思いか、と聞いてみたら、殆どの生徒が、そんなこと考えたこともないと言うのです。私の意見は、道徳の根本は想像力だということなのですが、でも、実際に生徒と話をしてみると、皆、結構、意見を言うのです。だから、これも根本原理に関わることで、別に道徳の時間だけでなく、全ての科目で、根本原理を考える授業を進めて欲しいと思うのです。特に、道徳の時間は、社会のいろいろなことについての根本原理を考えさせるのに適した授業だ

と思います。

それと、もう一つ言って置きたい大事なことは、根本原理を教えるだけでなく、それについて先生と生徒が一緒になって考える対話型授業も高等学校では十分成り立つということです。

池田 私は、道徳よりも哲学を教えたほうが良いと思います。正しい意味での哲学です。

畑田 哲学というのは、いろいろな科学の基礎・根本をきっちりと考えようという学問ですから、今申し上げたいいろいろな科目の根本原理を考えさせる授業と言うのは、それぞれの科目を通して哲学の考え方を学ばせるということになるとと思います。道徳の時間には、人生・社会の根本原理を考えさせようということです。自己実現というか、自分の意見を積極的に言うだけではなくて、お互いに対話をして、お互いに深め合い、自分の能力を最大限に発揮して、自分独自の形で社会に貢献できるようになる学習は、今後どんどん強化しなければならないことの一つだと思います。先ほどもお話ししたように、相互コミュニケーションの能力を高め、お互いの知識も深めるという対話型授業への適応能力を、今の生徒は十分に持っていると思います。

16. 学校を生徒や先生にとって楽しい場に一民間企業の発想を学校現場に持ち込むことの是非

畑田 学校の建物や設備で、改善した方が良いというご意見はありませんか。教員、生徒・学生、親、地域の人々にかかわるお話は沢山出たのですが。

池田 高知県で研究調査をされた外国の文化人類学者の人のお話なのですが、彼は学校の写真をいくつか見せながら、日本の学校の建物は醜いコンクリート造りで、画一化していて、訳の分からないデコレーションのようなものが付いていて、風景に溶け込んでいない、と言うのです。それを聞いて、私は、ひょっとすると、日本の学校の建物の様子が非常に均質化していて、外国人には、何となく風景になじまない、あたかも病院であるかのような心象を与えるのかなと思いました。学校というのは、極めて社会的な活動の場ですから、風景になじむ学校を作ることで、学校現場で働く人たちが、もっと社会とのつながりを持つ可能性があるかもしれません。これは、型から入って、内実を少しずつ変えていくというタイプの変革です。

畑田 風景になじんでいる学校を作ることで、学校の教職員の社会とのつながりを持つ意識が高まる可能性はかなり高いと思います。チャーチルが、「人は家を作り、家は人を作る」と言っています。大事なことだと思います。

ただ、学校だけでなく、最近の新しい建物には風景になじまず、街並みを壊しているような建物が多過ぎます。学校は社会の縮図だと言って済ましてはいきません。国民の意識改革はもちろん必要ですが、建築士をはじめとする建築関係の人たちの努力をお願いしたいところです。

池田 学校の先生方は、もっとくつろげる学校、生徒と楽しく過ごせる場としての学校の設計に関わって行って欲しいと思います。

大友 公教育の建物は、今さら、建て替えるわけにもいかないし、そんな予算もない、止むを得ないと思うのですが、私学では、建物の外観はともかく、内部を改装している学校は沢山あります。私どもも校舎は古いのですが、トイレを全部改装して綺麗にしました。これは、ものすごく好評です。そして、トイレマナーが向上しました。公教育でもこれ位は出来ると思います。

畑田 池田先生が言われたのとは、一寸違う面のお話ですが、これも非常に大事なことです。先生がやかましく言われなくても、トイレを綺麗にするだけで、トイレマナーが向上したというのは、学校の建物も先生とともに生徒を教育しているということです。つまり、建物もその中にいる人間を教育する力を持っている。私は、このような建物の教育力を「住育の力」と呼んでいます。子供の時、風邪をひいて、今フォーラムをやっているこの部屋で昼間寝ていて、天井を見上げると、天井板のいろいろな木目が目に入ってきて、あれは鬼、これは牛、あっちは滝というふうに、いろいろなイメージが頭に浮かんできました。先ほど、この家のつし（屋根裏部屋）に上がられた方は、この階段は何故壁に張り付いていてその上に何も無いのだろうか、この隅の空間は何に使ったのだろうか、など、いろいろと想像力を働かされたことと思います。古い建物は中

にいる人の想像力を高めるといふ力も持っているのです。この家にも教育の力があるのです。

畑田拓男 学校の現場での話しを少しさせて貰います。二十何年ぐらい前のことですが、学校がコンクリート塀で囲まれて、一般社会と隔離されているのは良くない、この塀を壊して網を張れ、ということになって、金網塀に変えた時期がありました。ところが、これで困ったのは、体育の授業で、女の子がブルマーをはいて体操していると、近所の人が網に食らいついて、じっと見るので、体育の授業が大変やり難い。それで、夾竹桃を植えたのですが、夾竹桃は非常に早く成長するので、今度は剪定の費用が沢山かかることになりました。今はどうなっているのか知りませんが、当時そういうことを言いだした人達は、その結果を一体どう考えていたのかな、と思うのです。当時の学校の塀は監獄の塀と同じだという捉え方にも問題がありました。そうこうするうちに、大阪教育大学付属池田小学校での児童殺傷事件が起こり、これを契機に日本の学校はそれまでの「地域に開かれた学校」から安全対策重視のガードマンに守られた「閉ざされた学校」に変わりました。良いと思ってやったことが裏目、裏目に出ているとも言えますが、それを認めた社会が悪いのか、あるいは、マスコミの影響か、良くは分かりませんが、私が今でも非常に疑問に思っていることの一つです。

池田 私が言っているのは、生徒が学校に行くのが楽しいという気分させるような空間作りのことで、単に建物を綺麗にするとか、塀を取ったり、付けたりすることではないのです。人間関係もある種の心象風景を作りますので、そういう意味での景観のことを言っているのです。

学校に行ったら楽しいとか、学校に行きたいという動機、これは、社会やその歴史に大きく左右されます。今の日本とは全く違う別世界のことを一寸ご紹介します。私は、今、中央アメリカのグアテマラで先住民の文化運動について調査をしております。内戦が36年続いて、学校に村人が集められて虐殺され、学校の裏が大量の秘密の墓地になっているというようなことがあります。内戦が終わって、先住民の子供たちが学校に行くようになったのですが、たまたま、子供たちとしゃべったときに、「君たち学校に行くのが何故楽しいの？」と聞いてみたら、学校で昼飯が出るからだ、と言うのです。簡単なスープとビスケットみたいなものだけなのですが、給食があるから学校に行くのが楽しいというわけです。この子供たちにとっては、学校に行かなくても、子供たち同士で遊ぶとか、農作業の手伝いをするとか、社会性を身につける機会一杯あるわけで、学校は、ただ給食を食べられるから楽しい。だけど、これは、学校教育をやっている先生たちにとっては非常にプラスの魅力になるわけです。とにかく、学校は楽しいところだと思って、子供が来てくれる。農作業の手伝いをさせなければならぬので、学校にやれないと言う先住民の親御さんたちを、一所懸命説得しなくても子供の方から給食を楽しみに来てくれるのですから、こんな有難いことはない。今は、大分状況が変わりましたが、少し前まではそういう時代だったのです。この場合は、学校が子供たちにとって楽しい場であるというのは、子供が、学校に居着いて、教育が役に立つからというよりも、子供たちが学校は楽しいところだと思って、それがどんな理由であっても、とにかく来てくれればよい、また、学校からドロップアウトして欲しくないという状況なのです。だから、落第の問題にしても、もし落第しても、それが学校に就学し続けることの魅力になるのであれば、落第させた方が良いでしょう。落第しても、自分は学校に行ったら頑張ったのだという本人の努力が報われるようなシステムになっていけば、落第はあってもいいと思うのです。立派なシステムが出来ていけば、それで良いというのではなくて、そのシステムのユーザーである先生や生徒が、一番ストレスを受けずに楽しくやれるような、そういう方法を模索していくという考え方のロジックでことを進めないと、駄目だと私は思います。そうしながら、現場主義というか、現場の意見を中心に、制度設計を少しずつ変えていくしかないと思います。

畑田 教育の制度・システムを、先生や生徒が、あまり大きなストレスを受けずに楽しく使えるものに、現場の意見を集約して、少しずつ変えていくことが大事であるという非常に重要なご提案を頂きました。落第にしても、落第したことを誇りに出来るような、落第のし方、させ方を、先生、生徒、保護者が一緒になって考えていけるような社会を作っていく必要があると、私は思

います。

ところで、今の日本では、給食だけで子供を学校に引きつけるというのは難しいと思います。建物の話は先ほどから出ておりますが、内部の部屋の使い方や設備の点はいかがでしょう。設備は十分なのでしょう。

男性 D 不十分です。必要なものは、殆ど無いと言ってもいいくらいです。

池田 だから、もっと親、先生、生徒が怒らないと駄目です。「学校が立派でない国は、滅びるぞ」というように、大きな声で言わないと駄目です。

畑田 教育とか文化は、現在のことだけを考えると、予算を切っても、やっていけるのです。でも、ちょっと未来のことを考えると、やってはいけない大変なことをしたことになるのです。

池田 その通りです。

久堀 この 10 年、われわれ教育の世界でいちばん我慢ならないのは、費用対効果という言葉です。この言葉で表わされる考えで、全てが支配されているのです。教育の仕事は、1 年や 2 年で答えが出てくるわけでもないし、効果が測れるわけでもないのに、その予算が費用対効果というこの 5 文字で決められてしまうのです。全く我慢ならないことです。この話は、今、言って頂いたことに、当たるかなと思います。

それと、もう一つ言わせて頂きます。よく、公のものに対して、民間の発想を適用するのが大事だと言われます。「君たち、民間レベルの発想を分かっているのか」というような言い方で言われるのです。ところで、今、池田先生が言われた現場主義ですが、大きな会社の皆さん方は、現場主義で、答えは現場にあると考えて、成功してこられたのだと思います。教育の世界は民間よりはもっと現場主義なのです。それにもかかわらず、文科省や大阪府教育委員会はこの教育の世界への民間の発想の適用については、現場主義をとってくれないのです。ほとんどの問題が、子供たちがいる現場にあるのです。それなのに、現場主義に立った判断がなされていないというのが、日本の教育の現状だと私は思います。

畑田 仕事の成果を短期間の費用対効果で判断するというのは、民間企業レベルの発想です。それを、成果をかなり長期的に判断しなければならない教育現場に持ち込むのは、現場主義に反する行いで、教育現場を混乱させる可能性が高いということを、行政・教育委員会が理解できないというのは、危惧すべき状況です。これを改善するには、結局は、国民の教育に対する理解のレベルを向上させるしかないということになります。その切っ掛け作りというか、そのための発信は、学校現場からするしかありません。教師と子供が保護者と一緒になってやるしかないと思います。

池田 そのためには、教師と生徒の間の対話を促進するような、教師も生徒も腹藏なく話せるような場所と機会を作っていくといけません。そこには知識の落差、人生の経験の落差があるからなので、何らかの翻訳のプロセスみたいなものは必要だとは思いますが。

畑田 その場合、保護者の意見の反映が大事だと思うので、PTSA の組織の活用を考えるのが良いと思います。

池田 PTSA での対話では、子供をどういうふうに育てたいのか、子供の人生にとって何が幸せなのかを、保護者も一緒になって、真面目に話さないといけません。

17. 教育に Philosophy を一根本原理を考える教育

畑田 先ほど、吉澤さんから PTA の会合をやっても、出て来て他人の意見を良く聞き、自分の意見も言って、いろいろなことを真面目に考えるようになって欲しいと思う人ほど、来てくれないというお話がありました。出席を強制するというわけにはいかないでしょうが、親としての、ある種の義務感を持って出席していただくと有り難いのですが。

池田 いやいや、強制というのは、いちばん恐ろしい。我々が 20 世紀に経験したことの中でいちばん恐ろしいのは強制です。良いことを強制されるのが、どれだけ恐ろしい結果を生み出してしまいか、というのを経験している人は多いはず。

畑田 大変大事なことを仰っているのです。誰かが言っていることが、真実かどうか、物事の根本原理に適っているかどうか、という議論が自由に出来ないような環境で、それが強制されたり、皆の義務になったりするの、非常に危険です。誰かの真実は、他の人にとっては真実でないことがよくあるのです。

池田 全体主義は、余剰の部分だとか、いい加減さを抑圧するのです。でも、実際は、その遊びとか、いい加減さとか、あるいは、たとえ落ちこぼれても、それもまた良いなあみたいなことも容認しないと、本当にとんでもないことになるのです。

畑田 先ほどもお話ししましたが、高校生に科学と道德という話をした時に、これまで「道德とは何だ」と思っていたかを書いてもらったら、多くの生徒が道德は洗脳だと思っていた、つまり、これが正しいというやり方があって、一斉にそうするのが道德だと思っていたと書いていたので驚いたのです。これでは、この言行が他人にどういう影響を与えるかということ、想像力を駆使して判断し、実行するという道徳的能力、生きる力ともいえると思うのですが、それをなかなか養えない、と感じました。小学校や中学校での道德の時間の授業の仕方を、少し考え直した方が良いのかなと、考えています。

池田 だから、私は、今の学校の道德の授業は駄目だと思うのです。道德の原理、なぜ道德が生まれるのかを考えること、哲学が必要だと私は思うのです。

畑田 私も、道德の根本原理を考えることが、非常に大事だと思います。道德に限らず、学校でいろいろな授業科目の根本原理を学ばせることが、これからの日本にとって必要であるということは、先ほどから、何度も申し上げているところです。

池田 そうすると、西洋の哲学でも、東洋の哲学でも、また、宗教思想でも何でもいいのですが、人間の意味を考え続けてきた、あるいは、生きることの意味を考え続けてきた哲学の知恵を、今の子供たちに伝えていくのが、大人の責務だと思うのです。

畑田 「哲学の知恵を子供たちに伝えるのが、大人の責務だ」、全くその通りです。ただ、私がここで、ひとこと言って置きたいのは、哲学を自分の専門にしておられる先生方は、哲学の本当の意味を、池田先生が先ほど言われた哲学の知恵を、哲学の専門家ではないが、その知恵を必要としている一般の人に、学校の授業をはじめとして、いろいろな機会をとらえて、良く浸透させて頂きたいということです。それは、これまで、学校教育の中で、物事の根本原理を考えさせる習慣があまりなかった日本にとって必要なことだと思うのです。

池田 そんなことをして貰わなくても、国民一人一人が哲学者になればそれで良いのではないですか。教育者になる人達は、全て日本国憲法を学ぶように、大抵の学生は、大学で哲学の授業を受けるのですから、自分が哲学者になるというか、根本原理を考える力は持っていると思うのです。哲学という名前の眠たい講義で、哲学を嫌いにしてしまうシステムに問題があるのだと私は思います。だから、そういう既存のシステムに頼るよりは、子供の時から、人間にとって生きるということを考えるのが非常に大事だとか、いろいろなことを一杯知っているけれどもその知識を活用できないよりは、知識は少なくとも物事を深く考えられる方が良いのだとか、人間は日常生活の中で良いことをするように生まれているのだ、あるいは、良いことを考えるように生まれているのだ、皆、悪いことはしないようになっているのだ、身の回りの人達を見てごらん、社会の成り立ちみたいなものを見てごらん、というふうに身近なところから考えていけば、いいのではないかと私は思うのです。

畑田 仰ることは全くその通りなのです。でも、日本の学校には、大学はともかくとして、物事の根本原理を考える授業が殆どなくて、また、家庭や地域社会でも、そんな機会はあまりなくて、国民の大部分は、哲学するというか、根本を考える習慣を持たないように思うのです。そういう状況では、誰かが、具体的には先生や専門家が、根本を考える切っ掛けを作る、あるいは、与えることが必要なのではないか、と私は言っているのです。

関口 全く同感です。それと、哲学という言葉は明治時代にできた **Philosophy** の翻訳語ですが、私の考えではこれが間違いのもとではないかと思えます。西周が作った言葉で、彼は多くの立派

な翻訳語を作っていますが、「哲学」はその生みの苦勞にもかかわらず訳しそこなった失敗作だと思います。学でなくて理、哲学でなくて哲理といえよかったです。丁度、物理学の対象として、物理、ものの理屈、すなわち、ものの存在を支配する原理という概念があるように、ものを考える理念を対象として、それを深く追及するのが Philosophy なのです。Philosophy はギリシャ語で Philo-sophia を語源とし、ここで philo-は愛好する、なじむ、親しむという接頭語、sophia は叡智、聡明という意味の言葉です。両者を合わせて Philosophy は叡智の探求、智を求めて深く考えること、これを哲理と訳せばよかったです。そして、丁度、物理を研究する学問が物理学であるように、哲理を学ぶ学問を哲理学、略して哲学と呼んで、学問とその対象とを区別すべきだったのです。物理学や哲学は難しいけれど、物理や哲理は誰にでもわかる日常的事の中にもあります。だから、国語や算数と同じように、哲理は子供の日常生活から始めるべきものなのです。毎日の夕食の時に、家族と一緒に食卓について一日の出来事を話し、今日こんなことがあった、こう思った、このように考えた、思考の整理をすること、これが Philosophy の始まりなのです。だから、ものを考えるということが一番大事で、それを幼稚園時代、小学生時代から、家庭で始めていないといけません。今の日本には、それがあまりにも少なすぎる。お父さんが帰ってくるのは夜の 10 時過ぎだとかで、みんなと一緒に食事をする機会すらなく、したがって食卓の団欒はない。学校に行ったら、今度はいろんなことを覚えさせられる。学校は知識を広めるところ、ものを覚えるところだと思ってしまう。それが間違いなのです。このように今の子供には、ものを考える場所がない、考える機会がない、考える手がかりがない。それが問題なのです。江戸時代の昔はそれでよかったです。寺小屋で読み書き・そろばんを習って、そのあと、もっと上級になれば論語・孟子の勉強をし、理解し、実践する、それだけでよかったです。その過程の中で考えて批判改良を加えることは当時の社会制度が許さなかった。それと同じ教育、江戸時代の寺小屋のような教育を、社会の外圧のなくなった今の日本の小学校、中学校でやっていて、高等学校でもなお続けているのです。大学に入って、遅まきながら考える教育を始めても、頭の中には既に知識のみを基礎とする回路が出来上がっているのです。本当に根の短い瘦せた Philosophy しかもたない、思考力の浅い人ばかりが多数出来上がるのです。もっとものを考える教育が大事なので、そのためには具体的にどうすればよいかを議論する必要があると思います。

畑田 物の根本を考えることが大事だという考えに反対する人はそんなに多くはありません。分野による違いはありますが、考える材料は、どんな授業の中にも、また、なによりも生活の中に一杯あるのです。考える材料は一杯あるのに、それについて考える習慣が日本には無かったし、今もまだ無い。「考える」というと直ぐに試験問題を想定するという状況です。でも、考える材料は、子供たちの周りにあふれているのですから、先生と親が考えることの重要性を認識さえして下されば、子供たちに考えさせることは、そんなに難しいことではないと、私は思います。

18. 継続は力なり

畑田 ところで、そろそろ会を閉じなければならない時間になりました。変えねばならない点についての話しは沢山出ましたが、変えてはならないという話は、あまりありませんでした。総合的な学習は変えてはならないというか、続けねばならないことの一つというご意見が強かったと思いますが、他にございますか。

池田 今日、先生方というか、とりわけ教育に携わってこられた方の経験を聞いた時に、私が非常に強く感じたことは、教育関係者の殆どすべてが改善する姿勢をお持ちだということです。今の教育には問題がある、これを解決するために何かを変えなければならないという姿勢、この姿勢は、イデオロギー、西洋流の考え方、東洋流の考え方、あるいは、政治体制などを超えて、日本の戦後教育の中に一貫してあって、それが、日本の教育水準と国民の教育に対する高い関心を維持していたのです。教育行政から末端の教師にいたるまで、教育に携わる人たちが、今よりもっと良くなりた、良くしたいと考える伝統みたいなものがあつたと思うのです。他の途上国で、こういうセンスを感じたことは殆どありません。教育を天から与えられた素晴らしい仕事、

すなわち、自分の天職(vocation)と考へ、生徒・学生との様々な出会いの記憶を糧にして、今日よりも明日の方が良くなりたいと考へるサブ・カルチャー、あるいは伝統・考へ方みたいなものが、教育に携わる人たちの間に残っているのです。私は、これは世界に誇れる文化的伝統で、絶対に変えてはならないものだと思います。

山本 変えてはいけないというよりは、守っていかねばいけないことを、一つ付け加えたいと思います。それは、地域の文化財の保存です。たとえば、この畑田家のような古民家ですが、これを維持・保存するにはかなりのお金がかかります。行政も文化財の保存のための財政的支援は、なかなか出来ない。それで、不経済だから潰してしまえ、というようなことになってしまったら大変です。丹比小学校の子供たちの教育にとっても、大きなマイナスになると思います。子供たちは、毎日、この畑田家の横を通って、この白い壁、黒い瓦の屋根、この建物の中をちらっと見ながら学校に行く、そしてまた、同じようにして家に帰る。このことが子供たちにとって、とっても教育になるのです。また、4年生や6年生がこの家に来て、中の様子を、時間をかけて見学するというのも、大変大きな教育力を持つのです。行政も地域社会の人達もこのような地域の文化財を守るということを真剣に考へていただきたいのです。この地域の文化財、ひいては、大阪の文化、文化財を守って欲しいということです。私が勤めている弥生文化博物館は、今、存亡の危機に立っています。経費がすごくかかるので、河南町の近つ飛鳥博物館に統合してしまえ、というわけです。それでいいのでしょうか。弥生文化博物館には、小学生、中学生、高校生が来て、勉強してくれます。4月から6月は、生徒で一杯になります。これをコストが掛るから廃止して、近つ飛鳥博物館に統合してしまえ、これで良いのでしょうか。確かに、博物館は維持費が年間1億円以上かかります。ところが、年間収入は、その1割にも満たないのです。行政がお金だけで判断したら、こんな無駄なことはやめてしまえとなっても、おかしくは無いのです。でも、これを廃止して、大阪の教育を語れるのでしょうか。今日のフォーラムの最後に、皆さんに強く訴えて置きたいと思うのです。

畑田 子供がよく利用する弥生文化博物館を行政が廃止したいというのは、予算の問題と、もう一つは、費用対効果だと思います。この博物館の効果を、博物館の収入だけで判断すれば、費用対効果の非常に低い事業ということになってしまいます。行政の、数値で表せない効果を判断する能力が問われます。でも、行政の判断は、地域住民の判断力に支えられて始めて有効になるという面を持っていることを忘れてはなりません。予算の執行も同じです。教育予算の充実への賛成は90%を超えるのに、そのための税負担の増額には30%の賛成しか得られないという、あるアンケートの結果は、国の教育の重要性に対する国民の考へを如実に示しています。日本の国民が、子供の教育について、もっと真剣に、具体的に考へてくれるよう、教育関係者がいろいろな面から努力を重ねる以外に、あまり良い方法は無いように私は思います。

久堀 変えてはいけないもので、ひとこと言わせていただくと、現在の日本の教育を形作っている日本の教育関連の法体系、これは変えてはいけないと思います。教育基本法があって、学校教育法があり、地域教育行政法がある、これに対応して、行政の中に、教育委員会という委員会を作って、いわゆる市長部局とは少し違ったスタンスで教育行政が行われています。この体系は、守っていかねばならない、変えてはいけないものだと思います。一般行政とは明確に一線を引いているのです。市長さんが変わるたびに、教育についての見方や施策が大きく変わるの、好ましくないと思います。国家100年の計とよく言われますが、教育行政では、現在の教育法体系を、しっかりと守り、その上で、その理解をもっと深めていく努力が必要だと思います。

畑田 教育基本法という名前は知っていても、中身を知らない人は非常に多いです。昔は、校長先生が月に一度、全校生徒の前で、教育勅語を読まれました。同じようにして、今、校長先生が教育基本法を、全校生徒の前で月一回読まれてはいかがでしょうか。割合、良いことが書いてありますから。

池田 子供語に翻訳しないと駄目ですね。私は、新旧の教育基本法の子供語を、Web ページで公開しております。日本国憲法も同様な試みをしています。子供にも分かるように、翻訳をしない

と駄目だと思います。

19. 終わりに一大人は子供のロールモデル

疋田 システムや予算に関わることは、今、直ぐ、簡単に変えることは出来ませんが、基本的なことで、子供は大人の背中、教師の背中を見て育つということです。これは、いつの時代でも間違いなく、そうです。先ほど関口先生が、晩ご飯を食べている時の、いろんな会話を通して、考える力が養われるという話をされました。まさに、その通りで、家庭の団欒の時間もそうなのですが、家庭も、地域の大人も、そういうことをしっかりと認識し、自覚を持ち続けておれば、子供が責任感のある立派な大人に育っていくと思います。こういう気持ちを、大人はお互い大事にしていくべきだというのが、私の感想です。

畑田 最後に非常に大事なことを言って頂きました。フォーラムの前半でも、戸川さんから、子供たちに適切なモデルを提示しなければならない立場にある教員、家庭、社会が、その役割を果たし切れていないというご指摘を頂いております。全ての大人が、日本と世界の社会の情勢をよく見極め、それに対処できる能力を身につけて、子供たちのロールモデルになる努力を続けて行くということなのです。高等学校に出前授業に行った時に、生徒から、「自分の周辺には、選挙で、どの候補者が最適かを深く考えもせずに投票したり、棄権したりする人がかなりいる。自分は、その人たちよりも一所懸命に考えているのに、投票権が無い。投票の権利が、年齢だけで定められているのは理解できない」と言われたことがあります。若者が、こういうことを言わなくても済む社会を出来るだけ早く作り上げねばと思います。

今日は、本当に多種多様な素晴らしいご意見を沢山聞かせていただきました。また、いろいろな問題が指摘され、一つの問題についても、ずいぶん違った意見があることも分かりました。参加いただいた方々は、教育に関する問題を、従来にも増して、一層いろいろと把握して頂いたことと存じます。それらについて、皆さまの地域でも話の輪を広げていただければ大変ありがたいと存じます。それが、畑田家住宅活用保存会のフォーラムの一つの目標でもあります。

ところで、このフォーラムの主題は「これからの教育を考える一変えねばならないこと、変えてはならないこと」であります。パネラーならびに参加者の皆さまから多くの貴重なご意見をいただきましたが、その殆どすべてがこれからの教育を如何にして今よりも少しでも良いものにするにはどのような変化が必要かという立場からのご意見でした。変えてはならないものに分類されるようなご意見も、ただ昔のままでよいというのではなく、それをさらに深めることが必要ということを描べるものであったと思います。そのことを踏まえたくて、最後に、「教育を天から与えられた素晴らしい仕事、すなわち、自分の天職と考え、生徒・学生との様々な出会いの記憶を糧にして、今日よりも明日の方がよくなりたいと考える日本の教育に携わる人たちの世界に誇れる文化的伝統を消してはならない」という池田教授のご発言を茲であらためて申し上げて、フォーラムを閉じたいと思います。長い時間の充実した話し合い、本当にありがとうございました。パネラーの先生方、ご出席の皆様方に、厚く御礼を申し上げます。